

北日長田遺跡 櫛待遺跡

第2次発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1996-584-01

1996



財団法人 山形県埋蔵文化財センター

北目長田遺跡
櫛待遺跡
第2次発掘調査報告書



1996 - 59

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



綠釉陶器(左から201、202、203)



製塙土器(SK67T出土)

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、第2次北目長田遺跡・櫛待遺跡の調査成果をまとめたものです。

北目長田・櫛待遺跡は山形県の北部、秋田県との境界を成す鳥海山の麓となる遊佐町に所在します。鳥海山は、その秀麗な姿で、古くから「出羽富士」と呼ばれています。鳥海山に貯えられた嚴冬の雪は春とともに雪解け水となり、眼下の広大な平野部へ注ぎ込み良質の米を作る貴重な水源となっています。

この度、平成7年度県営ほ場整備事業(高瀬川地区)に伴い、工事に先立って北目長田・櫛待遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、平安時代の掘立柱建物跡・土壙・溝状遺構などの遺構、遺物では土師器・須恵器・黑色土器・赤焼土器・石製品・土製品のほか、塙作りが行われたであろう製塙土器や近江座と推測される綠釉陶器などが出土しています。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例 言

1 本書は平成7年度県営は場整備事業(高瀬川地区)に係る「北目長田遺跡」「橋待遺跡」の第2次発掘調査報告書である。

2 調査は山形県教育委員会の委託を受けて、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 北目長田遺跡 (AYZKN) 遺跡番号 平成3年度登録(山形県1991)

所在地 山形県鮎川郡遊佐町大字北目字長田

調査期間 発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日

現地調査 平成7年5月8日～平成7年8月11日 69日間

調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当

調査第一課長 佐々木洋治

主任調査研究員 野尻 侃

調査研究員 佐藤 善春

遺跡名 橋待遺跡 (AYZSM) 遺跡番号 平成3年度登録(山形県1991)

所在地 山形県鮎川郡遊佐町大字北目字橋待

調査期間 発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日

現地調査 平成7年6月20日～平成7年7月19日 5日間

調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当

調査第一課長 佐々木洋治

主任調査研究員 野尻 侃

調査研究員 佐藤 善春

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所月光川土地改良区、遊佐町教育委員会など関係諸機関の協力を得た。

5 本書の作成・執筆は、野尻 侃・佐藤善春が担当した。執筆にあたり、施釉陶器については愛知県陶磁資料館の浅野員由主任学芸員、製塙土器については石川県中島町教育委員会の室田久則生涯学習課長・高田剛晃生涯学習課主事・山本純也生涯学習課主事補に御教示いただいた。記して感謝申し上げる。編集は尾形與典が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。

6 委託業務は下記の通りである。

北目長田遺跡 遺構の写真測量・実測 倒日本テクニカルセンター

資料の理化学分析(土器胎土分析) パリノ・サーヴェイ株式会社

7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S B…建物跡 S K…土壤 S D…溝跡・溝状遺構 E P…柱穴・ピット
E B…柱跡 S X…性格不明遺構 R…遺物 R P…登録土器・土製品
RM…登録金属製品 R Q…登録石製品 S…石

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。また、遺構番号のあとに「T」とあるものは、排水路設置地区から検出された遺構で、面調査区検出遺構と区別するために付したものである。

3 報告書執筆基準は下記の通りである。

- (1)遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。
- (2)グリッドの南北軸は、平成6年度実施した本遺跡第一次調査で設定したグリッドを踏襲した。グリッドは、ほ場整備計画線の農道センターラインを東西軸線とした。
- (3)遺構実測図は、1/40~1/200他の縮図で探録し、各々スケールを付した。
- (4)遺物実測図・拓影図は、原則的に1/4を基準として探録し、各々スケールを付した。また、大型の土器については1/6とし、付記している。なお、実測図中のスクリーントーン(網点)は黒色処理を、黒ベタは須恵器を表している。
- (5)遺物観察表中の計測値欄は現存値を示す。出土地点欄の層位では、「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I~IV」等は遺構を覆う土層(基本層序)を表している。
- (6)遺物図版については、1/3を基準とするが、一部に任意のものがある。
- (7)遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。遺構挿図中に示している遺物も同様である。

目 次

I 調査の経緯

1 調査に至る経過..... 1

2 調査の方法と経過..... 1

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境..... 3

2 歴史的環境..... 3

III 北目長田遺跡

1 調査の概要..... 5

2 遺跡の層序..... 5

3 遺構と遺物の分布..... 9

4 検出遺構..... 9

(1)獨立性建物跡..... 9

(2)土壤..... 12

(3)溝状遺構..... 17

(4)性格不明遺構..... 21

5 出土遺物..... 25

6 まとめ..... 43

IV 種待遺跡

1 調査の概要..... 51

2 検出された遺構と遺物..... 52

3 まとめ..... 52

V 総括..... 53

報告書抄録..... 58

表

表1 北目長田遺跡遺構観察表(1) 土壙	23	表5 北目長田遺跡遺物観察表(3)	39
表2 北目長田遺跡遺構観察表(2) 溝跡	24	表6 北目長田遺跡遺物観察表(4)	46
表3 北目長田遺跡遺物観察表(1)	27	表7 北目長田遺跡遺物観察表(5)	47
表4 北目長田遺跡遺物観察表(2)	33		

挿 図

- | | | | |
|--------------------------|----|---------------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図 | 2 | 第17図 遺物実測図(3)須佐環・須佐器 | 31 |
| 第2図 遺跡概要図 | 4 | 第18図 遺物実測図(4)須佐器・須佐器 | 32 |
| 第3図 北目長田遺跡層序図 | 5 | 第19図 遺物実測図(5)須佐器 | 34 |
| 第4図 北目長田遺跡調査概要図 | 6 | 第20図 遺物実測図(6)須佐土器 | 36 |
| 第5図 北目長田遺跡道構配図 | 7 | 第21図 遺物実測図(7)須佐土器 | 37 |
| 第6図 SB 1 建物跡実測図 | 10 | 第22図 遺物実測図(8)須佐土器 | 38 |
| 第7図 SB 2 建物跡実測図 | 11 | 第23図 遺物実測図(9)赤土土器・赤土土器 | 41 |
| 第8図 SK399-340-400土壤実測図 | 13 | 第24図 遺物実測図(10)赤土土器・赤土土器 | 42 |
| 第9図 SK337-321-453他土壤実測図 | 15 | 第25図 遺物実測図(11)洋繩輪・須佐土器 | 44 |
| 第10図 SK350-293-341他土壤実測図 | 16 | 第26図 遺物実測図(12)6器 | 45 |
| 第11図 SK67T-99T-75T土壤実測図 | 18 | 第27図 墓書集成 | 48 |
| 第12図 溝状遺構実測図 | 19 | 第28図 土器組成図(1) | 49 |
| 第13図 SD408-771-387他溝跡実測図 | 20 | 第29図 土器組成図(2) | 50 |
| 第14図 SD336-404-927他溝跡実測図 | 22 | 第30図 横待遺跡調査概要図 | 51 |
| 第15図 遺物実測図(1)柱脚器・黑色土器 | 26 | 第31図 横待遺跡遺物実測図 | 52 |
| 第16図 遺物実測図(2)須佐器・須佐器 | 30 | 第32図 出内地方製造土器出土遺物・製造土器実測図 | 55 |

図 版

巻頭図版 1 緑釉陶器（上）・製塙土器（下）

- | | |
|-------------------------------------|---------------------|
| 図版 1 北目長田遺跡近景・調査区全景 | 図版13 北目長田遺跡出土遺物(5) |
| 図版 2 調査風景・北目長田遺跡基本層序 | 図版14 北目長田遺跡出土遺物(6) |
| 図版 3 トレング遺構検出状況・SB1・SE2柱立柱建物跡 | 図版15 北目長田遺跡出土遺物(7) |
| 図版 4 SK399-337-340土壤 | 図版16 北目長田遺跡出土遺物(8) |
| 図版 5 SK321-455-314-311-350土壤 | 図版17 北目長田遺跡出土遺物(9) |
| 図版 6 4トレング(SK67T他)遺構検出状況・土割断面・直断面状況 | 図版18 北目長田遺跡出土遺物(10) |
| 図版 7 SD387-927-562-708-408-464他溝跡 | 図版19 北目長田遺跡出土遺物(11) |
| 図版 8 北目長田遺跡遺物出土状況 | 図版20 北目長田遺跡出土遺物(12) |
| 図版 9 北目長田遺跡出土遺物(1) | 図版21 北目長田遺跡出土遺物(13) |
| 図版10 北目長田遺跡出土遺物(2) | 図版22 北目長田遺跡出土遺物(4) |
| 図版11 北目長田遺跡出土遺物(3) | 図版23 北目長田遺跡出土遺物(5) |
| 図版12 北目長田遺跡出土遺物(4) | 図版24 横待遺跡調査風景・出土遺物 |

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

遊佐町北西部に位置する富岡から北目・山崎集落などの高瀬地区一帯には、庄内高瀬川や月光川の流れに沿って数多くの平安時代を主とする遺跡が点在している。これらの遺跡の立地基盤は、上記河川が形成した微高地（自然堤防）と理解できる。当時の集落は、今日まで辛うじて地中にその痕跡を止めてきたが、県営ほ場整備事業等の大規模な開発の波を受けるようになった。そこで、県教育委員会では、昭和54年度から遺跡群分布調査を継続的に実施し、遺物の分布や遺存状況、範囲等が明らかになってきた。北目長田・横待の両遺跡は、平成2年度のA調査（現地確認調査・表面踏査）によって遺物の分布が確認され、遺跡台帳に新規登録された遺跡である。その後、平成3年度と平成4年度に行われたB調査（探査調査）によって、北目長田遺跡は東西560m・南北210m、横待遺跡は東西460m・南北280mの範囲に広がる平安時代の集落跡であることが確認された。

平成6年度、県営は場整備事業（高瀬川地区）が、この2つの遺跡を係ることになり、現状保存を前提とした事前の調整が行われた。しかし、止むを得ず削平されると判断された部分（北目長田遺跡3,300m²、横待遺跡1,000m²）については、山形県埋蔵文化財センターが主体となって、平成6年度に緊急発掘調査を実施している。（『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第24集）。平成7年度にも、引き続き同事業との関連で止むを得ず削平されると判断された北目長田遺跡域の7,920m²及び横待遺跡域の1,500m²について、第2次緊急発掘調査を実施する運びとなったのである。

2 調査の方法と経過

平成7年4月20日、月光川土地改良事務所管内に係る遺跡発掘調査の打ち合せ会を開催して最終協議を行い、同年5月8日より現地調査を開始した。北目長田遺跡の面的削平計画区域の表土除去作業から開始し、面整理作業を継続しながら、前年度実施した本遺跡のグリッド基準線を基本に調査区を設定した。北目長田遺跡の排水路計画部分、横待遺跡の排水路計画部分という順序で調査の範囲を広げ、調査区から始まるトレングを5m単位で区切り、遺構・遺物の登録を行った。以下に、その実施状況を列記しておく。

平成7年5月8日、調査事務所を設置。5月10日、北目長田遺跡調査区の削平計画区域面的な部分の表土除去作業に入る。以後、遺構検出に向けての面整理を継続。多量の遺物と土壤・溝状遺構等の遺構を確認する。6月13日からは排水路計画部分（1T～7T、14T～15T）の表土除去を行い、遺構・遺物の密集域が明らかになる。6月29日より、検出した遺構の精査・記録作業を開始。雨天が続き排水作業に追われることもあったが、8月11日に予定どおりすべての調査を終了した。横待遺跡調査区（8T～13T）については、6月20日より表土除去作業に入ったが、遺構・遺物は希薄で、7月19日で調査を終了した。なお、調査期間中（8月4日）に、調査成果を公表するための調査説明会を開催したこと、雨天にもかかわらず約90名の参加が得られたことを付記しておく。

I 調査の経緯



1. 北目長田遺跡(1994・1995) 2. 鳥持遺跡(1994・1995) 3. 常田遺跡(1994) 4. 宮ノ下遺跡(1995) 5. 菊田遺跡(1992)
 6. 野瀬遺跡 7. 中田遺跡(1992) 8. 上山崎遺跡 9. 田中遺跡 10. 地藏田遺跡 11. 木戸下遺跡(1994) 12. 上高田遺跡(1994)
 13. 道中A・B遺跡 14. 石田遺跡(1992) 15. 宅田遺跡(1982) 16. 大坪遺跡(1990・1994) 17. 三田遺跡 18. 従姫遺跡(1991)
 19. 本原遺跡(1992・1993) 20. 古屋敷遺跡 21. 小源田遺跡(1988) 22. サナミ坂遺跡 23. 蛇神社西遺跡 24. 蛇神社東遺跡
 ※()数字は発掘調査年

第1図 遺跡位置図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「吹浦」を使用)



第1図 遺跡位置図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「吹浦」を使用)
—2—

1. 北目長田遺跡(1994・1995) 2. 稲荷遺跡(1994・1995) 3. 石田遺跡(1994) 4. 宮ノ下遺跡(1995) 5. 畠田遺跡(1992)
6. 野瀬遺跡 7. 中田遺跡(1994) 8. 上高田遺跡 9. 中高田遺跡 10. 滝瀬遺跡 11. 下高田遺跡(1994) 12. 月光川遺跡(1994)
13. 宮中A・B遺跡 14. 石田遺跡(1993) 15. 佐山遺跡(1983) 16. 大坪遺跡(1990・1994) 17. 三田遺跡 18. 四井遺跡(1991)
19. 小津遺跡(1992・1993) 20. 宮若曾遺跡 21. 小原遺跡(1992) 22. ナカ・駒ヶ原 23. 利光神社西宮跡 24. 前竈神社東宮跡
(*)数字は発掘調査年

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

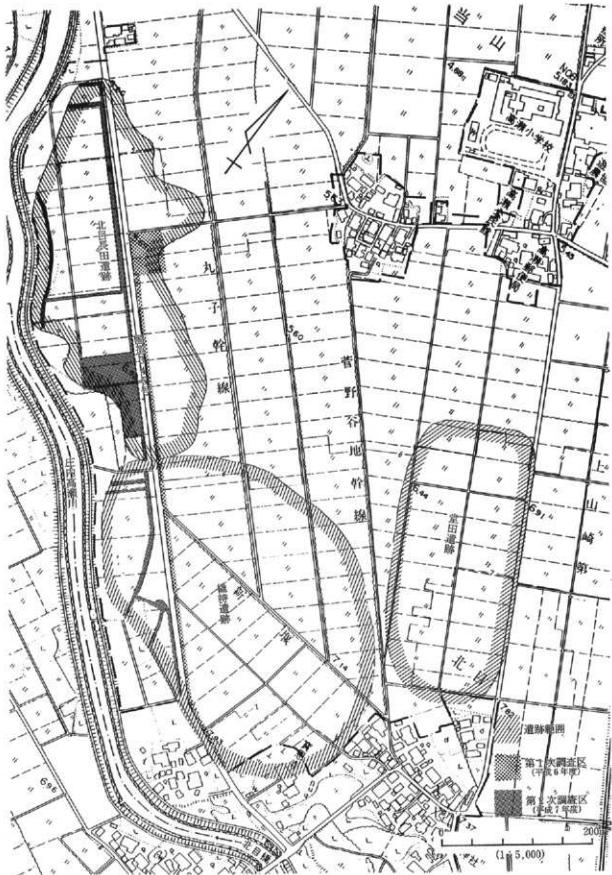
北目長田遺跡と、それに隣接する稲荷遺跡は、飯海郡遊佐町の中心部から北西方向に約3kmの国道345号沿いに位置している。庄内平野の北端にあたり、北から北東方にかけて鳥海山の雄姿と綾やかに連なる稜線を見渡すことができる。西方へ約3kmで日本海に達するが、その手前には季節風を遮る庄内砂丘が迫っている。一帯は水田で、北西方に丸子、北方に上山崎、南方に北目の各集落がある。遺跡の範囲は、第2図で示すように、両遺跡とも東西約500m・南北250m前後で、標高は、北目長田遺跡調査区付近で5.8mを測る。

この周辺には、北目長田遺跡・稲荷遺跡をはじめ、庄内高瀬川に沿って並ぶ形で、平安時代を中心とする遺跡が数多く点在している。これらの遺跡が立地する一帯は、庄内高瀬川や月光川など北西に流下して日本海に注ぐ中小の河川が形成した沖積平野である。現在は、水田耕作他の影響からだいぶ平坦化されているが、かつては自然堤防による微高地や葦や茅の生い茂る後背湿地が、流路に沿つてより明確な形で存在していたものと推察される。当時の人々は、比較的高燥な自然堤防上を居住空間に、低湿な後背湿地や小河川のそばは水田にと、自然地形をうまく低地での居住域を拡大していったと捉えることができるだろう。また、平成6年度に発掘調査を実施した大坪遺跡や上高田遺跡で検出された幅15~20mの河川跡は、長い年月にわたって繰り返された河川の氾濫によって、流路や地形が変化してきたことを物語っている。

2 歴史的環境

遊佐町管内では、これまでに170箇所以上の遺跡が確認されており、県内でも有数の遺跡密集地である。この中で、北目長田・稲荷遺跡を含めた平安時代を中心とする集落跡については、20を超える遺跡が発掘調査されている。高瀬川沿いに限っても、北目長田・稲荷遺跡の他に筋田遺跡、野瀬遺跡、中田浦遺跡、上高田遺跡、木戸下遺跡、宮ノ下遺跡、石田遺跡、宅田遺跡、大坪遺跡等が連続して分布しており、注目に値する(第1図)。

これまでの調査の結果、これらの遺跡のほとんどは9世紀から10世紀にかけて継続していることが確認されている。これは、酒田市や八幡町等も含めた飽海郡域の遺跡に共通する在り方である。つまり、9世紀に入って、この地域の様相が一変したことになる。これは、当時の律令政府が推し進めた古代東北の開拓と係わっていると推定される。712年の「出羽国」建國以来、国府や城柵の設置・移転によって、この地域に対する政府の支配が拡大または縮小していく。これらの集落はその過程の中で存在したのである。特に、本遺跡より南方約8kmに位置する「城輪柵跡」は、出羽国四日町の国府に比定され、周辺集落と密接な関係を保っていたと考えられる。遊佐町の遺跡のなかでも、縄錆・灰釉陶器と地鎮のための特殊埋設遺構を検出した下長瀬遺跡、板材列を伴う掘立柱建物跡の小深田遺跡、灰釉陶器・墨書き土器のまとまりと京への貢献を示す木簡出土の大坪遺跡等、官衙関連の性格を推定できる内容を持っている。



第2図 遺跡概要図(S=1:5,000)

III 北目長田遺跡

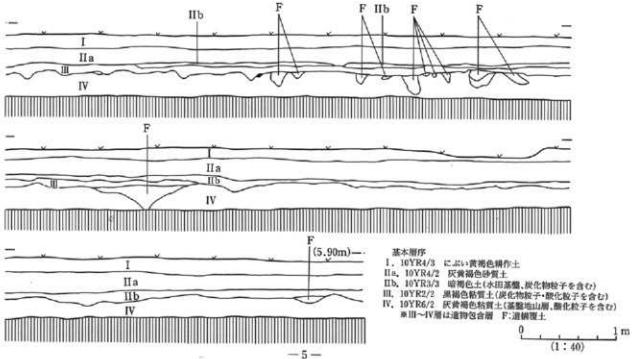
1 調査の概要

今回の調査は、北目長田遺跡域の南西部部分4,700m²と排水路計画部分3,220m²を調査対象区として実施したものある。平成6年度は遺跡域の北東部分を調査しており、今年度は第2次調査となる(第4図)。調査区の設定から始めて、表土の除去、面整理・面精査、遺構検出他一連の手順で進めたが、以下に、各作業の工程と経過を略記しておく。

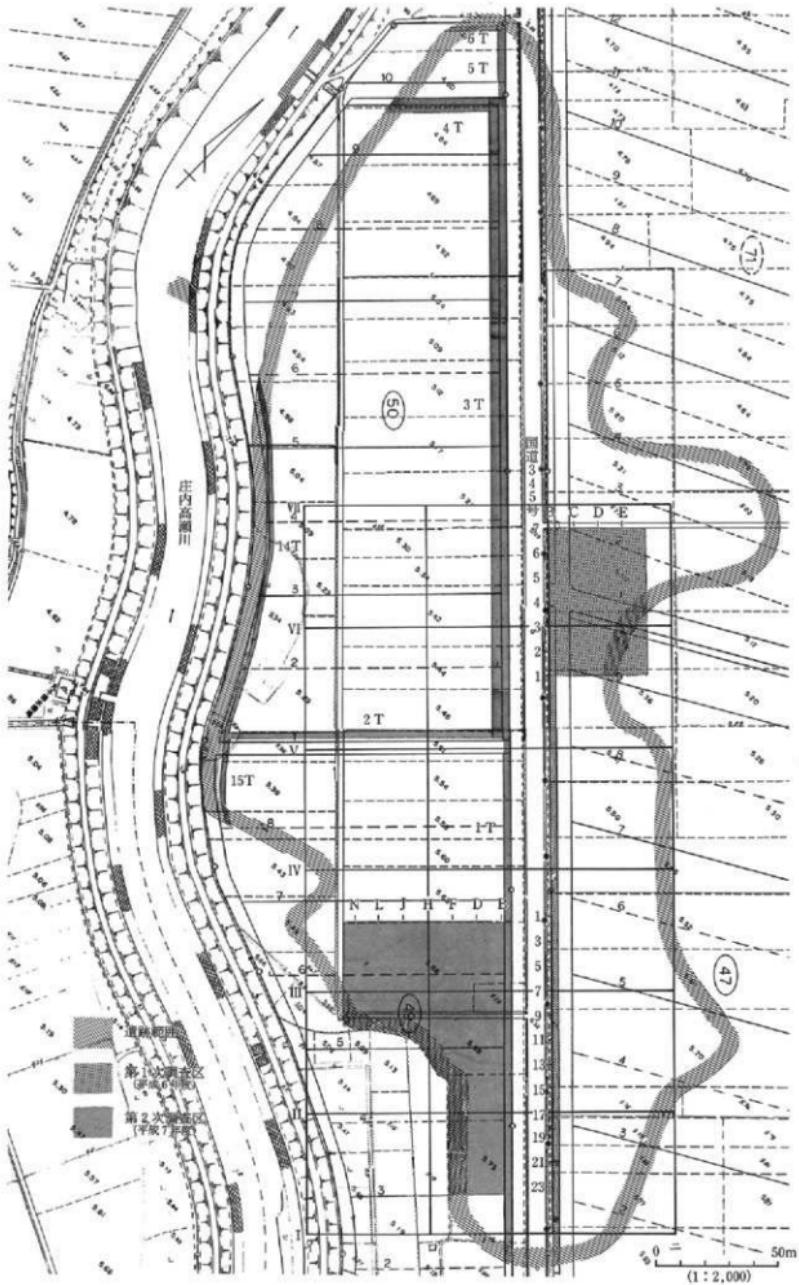
平成7年5月8日、発掘機器の搬入と現場事務所の設置を行った。翌5月9日に調査区(大区画)を設定し、5月10日から5月31日まで8日間にわたり、重機を導入して面的部の表土除去作業を実施した。5月24日には、調査区内に5m四方の小区画を設定した。その後遺構検出に向けての面整理及び面精査を継続し、6月28日で大方の遺構の検出を終了した。排水路計画部分については、6月13日から6月20日まで5日間で重機による表土除去作業を行い、面的部と並行して面整理・面精査を行った。検出した遺構については、遺構配置図(1:50)を作成し、6月29日からは遺構の登録と精査を開始した。遺跡の性格や内容を示すと考える遺構については、平面図・断面図(1:10, 1:20)の作成及び写真撮影を行った。また、出土した遺物についても、遺構の時期を示すものについては登録して、出土地点・レベル等の記録と写真撮影を行っている。調査の最終段階として、8月4日に調査説明会、8月9日に空撮による測量を行い、8月11日に調査を終了した。

2 遺跡の層序

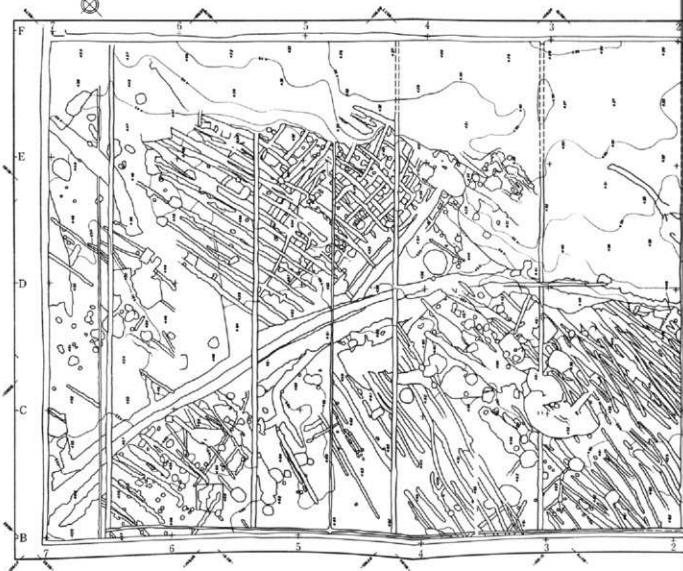
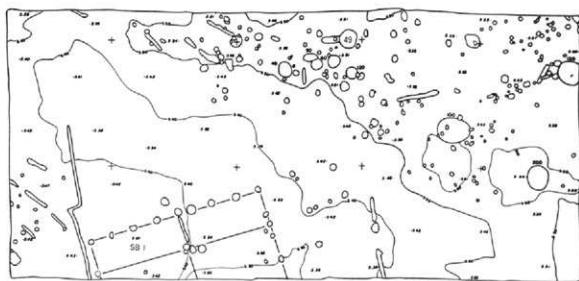
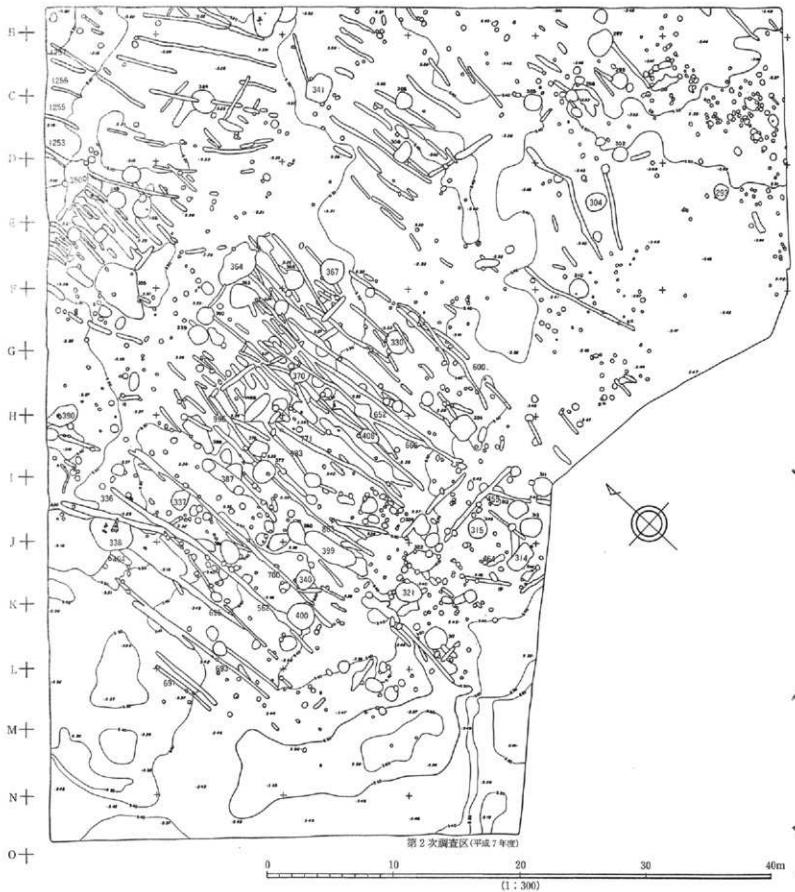
第3図は、調査区西側(A-1~4グリッド付近)の土層断面を示している。I~II層は第1次調査のI層に相当し、耕作土及び水田基盤層である。III層は、第1次調査のII層に相当し、黒褐色粘土質で炭化物粒子を含んでいる。第1次調査同様、III層からは多量の遺物の包含が認められた。遺構検出面はIV層の上面で、断面では遺構覆土FがIV層に入り込む形になっている。地表面から遺構検出面までの深さは約40~50cmである。



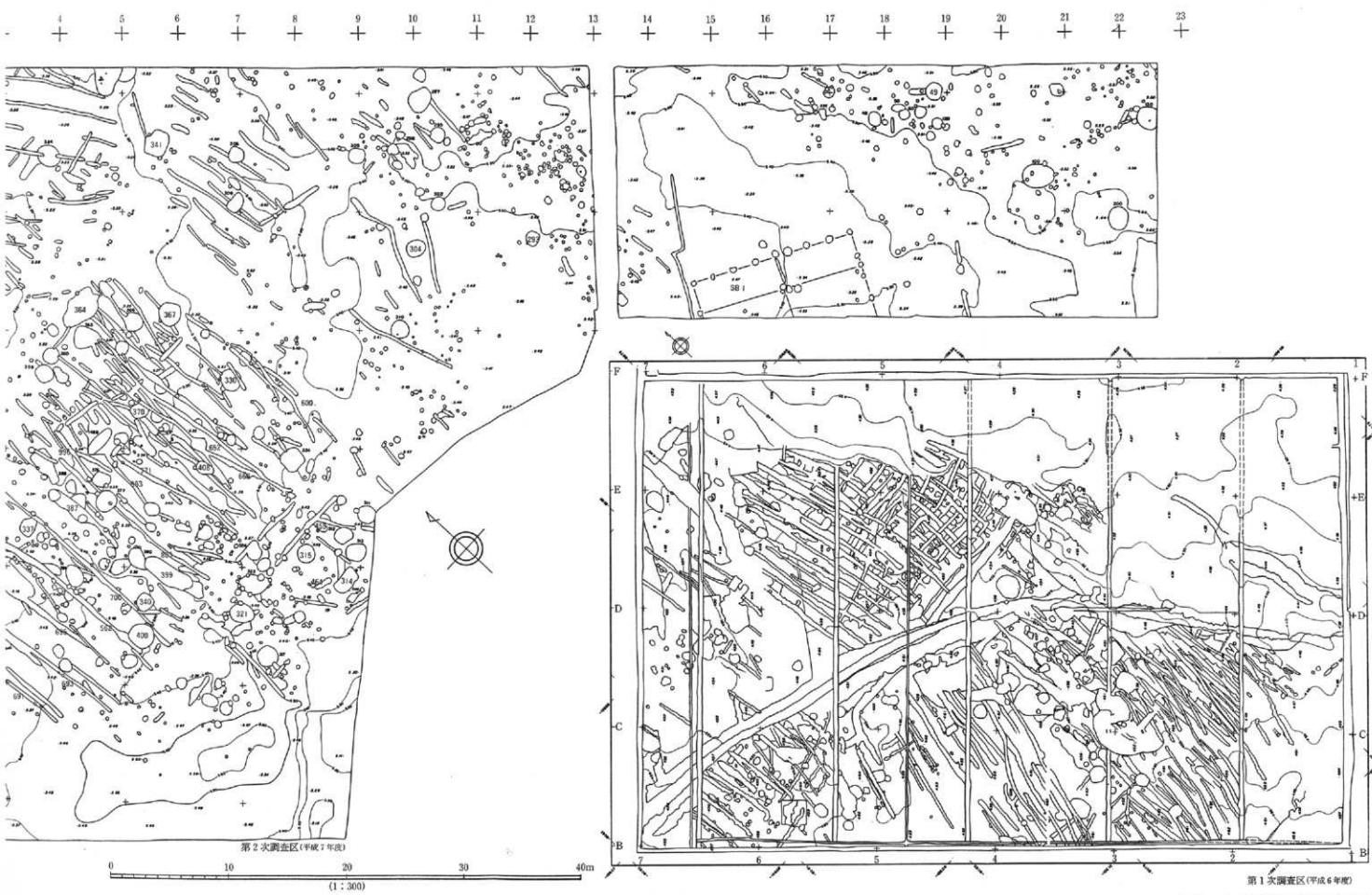
第3図 北目長田遺跡層序図(A-1 ~ 4グリッド)



1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 + 8 + 9 + 10 + 11 + 12 + 13 + 14 + 15 + 16 + 17 + 18 + 19 + 20 + 21 + 22 + 23 +



第5図 北目



第5図 北目長田遺跡遺構配置図(S=1:300)

3 遺構と遺物の分布

検出遺構の配置状況は、第5図に示した通りである。建物跡は、掘立柱建物跡が調査区で1棟(SB1:第6図)、3トレンチで1棟(SB2:第7図)検出された。最も多く検出されたのは、調査区西側を中心に広がっている396条の溝状の遺構群で、第1次調査区(第5図右下)と類似した配置状況を示している。大部分の溝跡は、ほぼ南北方向に配置され、方向や規模の違いから3時期の変遷が認められた。第1次調査区では、建物跡から溝跡群への変遷も確認されたが、本調査区では認められなかった。これらの溝跡の中には、SD336(第13図)やSD387(第14図)のように須恵器裏他の遺物がまとめて出土した溝跡もある。次いで、溝跡群に重複する位置に土壙が多数検出され、登録数は184基に上った。平面形態が長軸2m前後の楕円形や隅丸方形を呈し、深さ20~30cm程度の規模を有する土壙が中心である。土壙内には、赤焼土器壊や小型甕を主とした土器類を含んでいる場合が多い。

遺物は、遺物包含層(III層)からコンテナ75箱分、遺構内から40箱分出土した。遺構内遺物の75%以上は赤焼土器で、須恵器は15%程度である。器種別では、須恵器・赤焼土器とも壊が80%以上を占める。また、製塙土器がまとめて出土しており、破片集計で759点を数える。遺跡北西端部の4トレンチSK67Tからは129点の製塙土器片が一括出土している。このような出土状況は、第1次調査区でもみられ、本遺跡の特徴のひとつといえる。他に、SK399土壙からは、綠釉陶器皿も出土している。

4 横出遺構

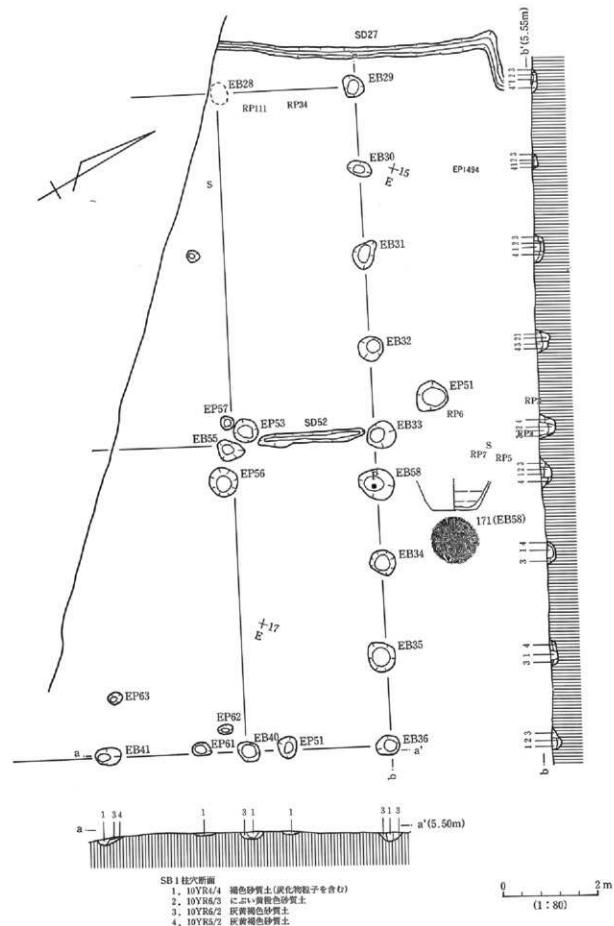
今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、土壙184基、溝状遺構396条、ビット約1,000基。性格不明遺構6基などで、登録した遺構の総数は1,600を越える。そのうち約1,500は、剖面計画区域に係る調査区で検出された遺構である。トレンチでは、主な遺構のみの登録となつたが、SB2建物跡を検出した3T-1~4(第7図)と製塙土器出土のSK67Tを含む4T-6~7(第11図)他、調査区西方2T-14付近、3T-23~26、3T-42~47、遺跡北端部5T-2~6で遺構の密集域が確認された。

1) 掘立柱建物跡

SB1建物跡(第6図) D~F-14~17グリッドに位置し、梁行三間以上・桁行七間の東西棟である。柱間は、梁行で10尺、桁行で6尺等間と捉えられ、 113.4m^2 (35坪)以上の規模を有する。EB33とEB55を結ぶ線上には間仕切りがあったものと考えられる。掘り方は径40~60cm、検出面からの深さ15~20cmを各測る。遺物は、EB58の底面より出土した赤焼土器壊(171)他、SB1の柱穴全体で50点余りの土器片が出土した。ほとんどは赤焼土器片である。建物の主軸方位は、N-62°-Wである。

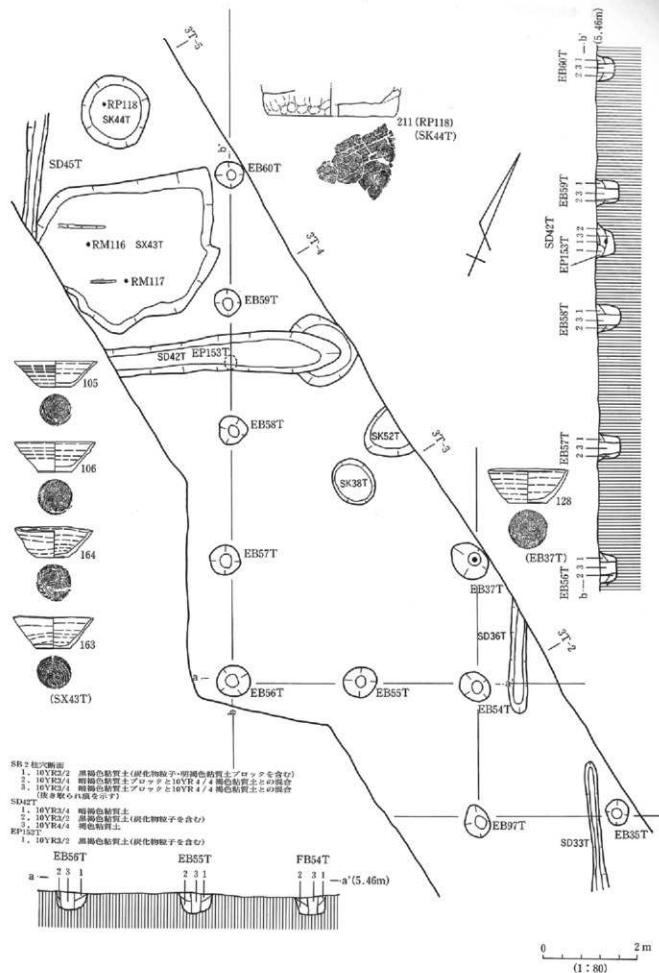
SB2建物跡(第7図) 3トレンチの3T-1~4グリッドに位置する。国道345号を挟んで北方向が第一次調査区となる(第4図参照)。梁行三間以上・桁行四間以上の南北棟で、南側に扉をもつことが確認されたが、北半が調査区外に係るため全形は明らかでない。柱間は、梁行・桁行とも9尺等間を割る。掘り方は、径約60~80cmの隅丸方形を呈し、柱

III 北目長田遺跡



第6図 SB1 挖立柱建物跡

- 10 -



第7図 SB2 据立柱礎物跡

- 11 -

穴の中には柱桿を立てたと考えられるアタリが径20~30cmに確認できる。検出面からの深さは40~50cmを測る。柱間を含めて全体に規模の大きい建物と考えられる。105点を数える遺物の大半は赤焼土器片であるが、E B37T出土の赤焼土器環(128)は、建物跡の時期決定に係る資料となる。建物の主軸方向は、N-12°-Wである。

2) 土壙

検出された184基の土壙のうち、まとまった遺物を出土した土壙の多くは、溝状遺構の密集域(F~Kグリッド)に分布している。また、主な土壙については、その形態や規模等の特徴(表1参照)から次のように類型化できる。

A類：平面形態が円形または隅丸方形で、長軸1~1.5mの規模を有する土壙。SK K 49・180・293等、調査区東側A~Dグリッドの土壙に該当するものが多い。

B類：平面形態が隅丸方形で、長軸が1.6~1.9mの規模を有し、まとまった遺物が出土した土壙。SK 337・340・370等の溝状遺構密集域(F~Kグリッド)に分布する土壙及びSK 44T・67Tのトレチで検出された2つの土壙が該当する。

C類：形態は一様ではないが、長軸が2~2.5m内外の比較的大型の土壙。溝状遺構群の南側に位置するSK 314・321・455P4トレチのSK 75T等が該当する。

D類：長軸が5m内外を測る長幅円形の大型土壙。SK 350・399の2例が該当する。

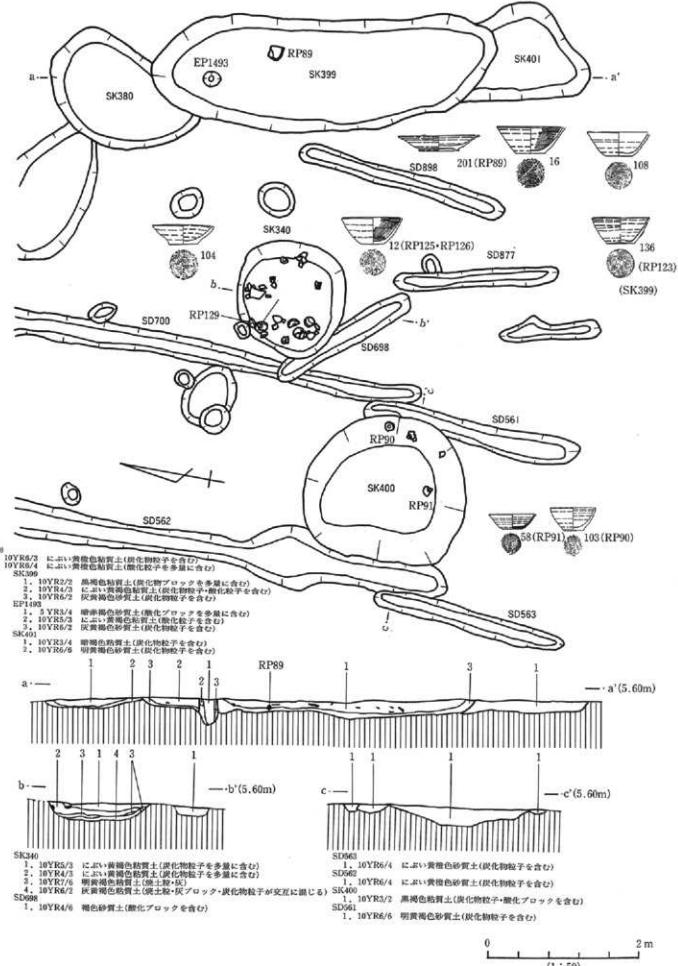
以下、代表的な土壙について挿図に從って概述する。

SK 399(第8図) I~J-5グリッドに位置し、SK 380とSK 401を切る重複関係を持つ。平面は長幅円形で、長軸4.5m・短軸1.5m、深さ20cmの規模を有する大型の土壙である。覆土は3層からなり、F 1層は炭化物ブロックを多量に含む。F 1層と土壙底面より近江産と推測される綠釉陶器が2点(201、202、巻頭図版上)出土しており、注目に値する。他に、赤焼土器環・甕・須恵器環・蓋、黒色土器環・製塙土器・磁石と多様の遺物が出土している土壙である。

SK 340(第8図) J-5グリッド、SK 399の西方3mに位置する。SD 700に接し、SD 698を切る。平面は隅丸方形で、長軸1.6m・短軸1.5m、深さ24cmの規模を有するB類の土壙である。覆土は4層からなり、F 1・F 2層は炭化物粒子を多量に含む。F 3層は焼土粒・灰で構成され、F 4層にも焼土粒・灰ブロックが混入する。出土した遺物には、黒色土器環(12)、赤焼土器環(104、122、136)があるが、いずれもF 1・F 2層からの出土である。赤焼土器環(136)には内外面に漆が付着しており、擦出痕が認められた。

SK 400(第8図) K-5グリッド、SK 340の南西2.5mに位置する。SD 561とSD 562を切る重複関係を持つ。平面は円形で、長軸2.51m・短軸1.92m、深さ25cmを測り、C類に属する。覆土は、褐色粘質土の1層で、糸切り須恵器環(58)、赤焼土器環(103、117、147)が出土している。

SK 337(第9図) I-3グリッドに位置し、SD 700に接する。平面は、隅丸方形で長軸1.6m・短軸1.24m、深さ20cmを測り、B類に属する。覆土は、炭化物粒子を含む2層からなるが、遺物はF 1層の上面から集中的に出土した。赤焼土器環(112、114、119、154、157)が出土している。



第8図 SK 399・340・400土壙

155、156、168等)を括弧で示す状況が見える。

S K321(第9図) J-6~7グリッドに位置し、E P751、E P753、E P810等と重複関係を持つ。平面は横円形で、長軸2.5m・短軸1.6m、深さ36cmを測り、比較的大型のC類に属する。覆土は、火山灰ブロックを含むF1層、黑色炭化灰のF4層他、5層からなる。遺物は、F1層から黒色土器壺(24)、F2層から赤焼土器壺(150、151)、F3層から赤焼土器壺(181)、F4層から赤焼土器壺(152、153)が出土した。出土総数は、破片集計で229点に上る。赤焼土器が主体で、窓170点、壺93点を数える。

S K455(第9図) I-8グリッドに位置し、S K454を切り、S D457とS D453に切られる重複関係を持つ。平面は横円形で、長軸2.1m・短軸1.63m、深さ20cmを測る。覆土は5層からなり、F4層は黑色炭化灰である。類型ではC類に属するが、出土遺物にヘラ切り須恵器壺が4点(50、51、55、69)あることが注目される。赤焼土器壺が主体の他の土壙とは、明らかに異なる様相を呈している。

S K370(第9図) G-5グリッドに位置し、溝状遺構群の中でS D1461とS D1485を切り、S D989に切られる重複関係を持つ。平面は横丸方形で、長軸1.6m・短軸1.22m、深さ23cmを測る。覆土は5層からなり、F3層は黑色炭化灰である。墨書「し」を持つ黒色土器壺(11)、文字は不明だが、体部に墨痕を持つ赤焼土器壺(115)、赤焼土器壺(185)等が出土している。

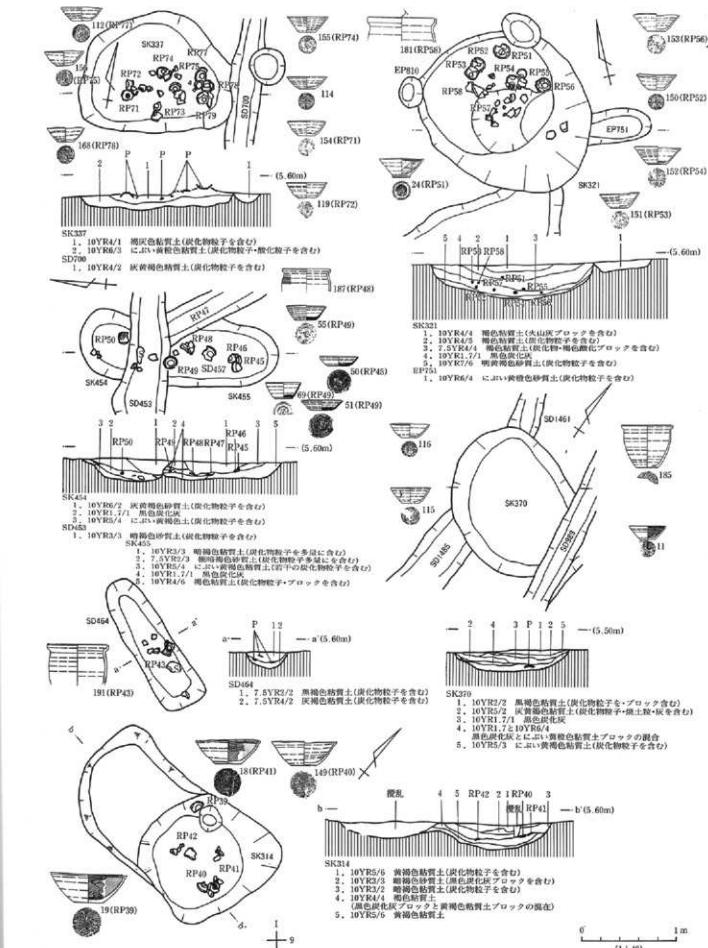
S K314(第9図) J-9グリッドに位置する。平面は長方形で、長軸2.21m・短軸1.23m、深さ27cmを測る。西側は擾乱を受けているが、東側の覆土は5層からなる。東側より黒色土器壺(18、19)、赤焼土器壺(149)等が出土している。

S K350(第10図) 調査区北端のD-1グリッドに位置する。長軸5.13m・短軸0.74mの規模を有する大型の土壙である。製塩土器片が24点出土したのをはじめ、「富」の墨書を底部に持つ黒色土器高台付壺(23)、判読不明の墨書を体部に持つ赤焼土器壺(258、298、302)、須恵器顕頭壺(89)等の遺物が出土している。検出地点、形態・規模、遺物の出土状況、いずれの面からみても本調査区では特異な土壙であるといえる。

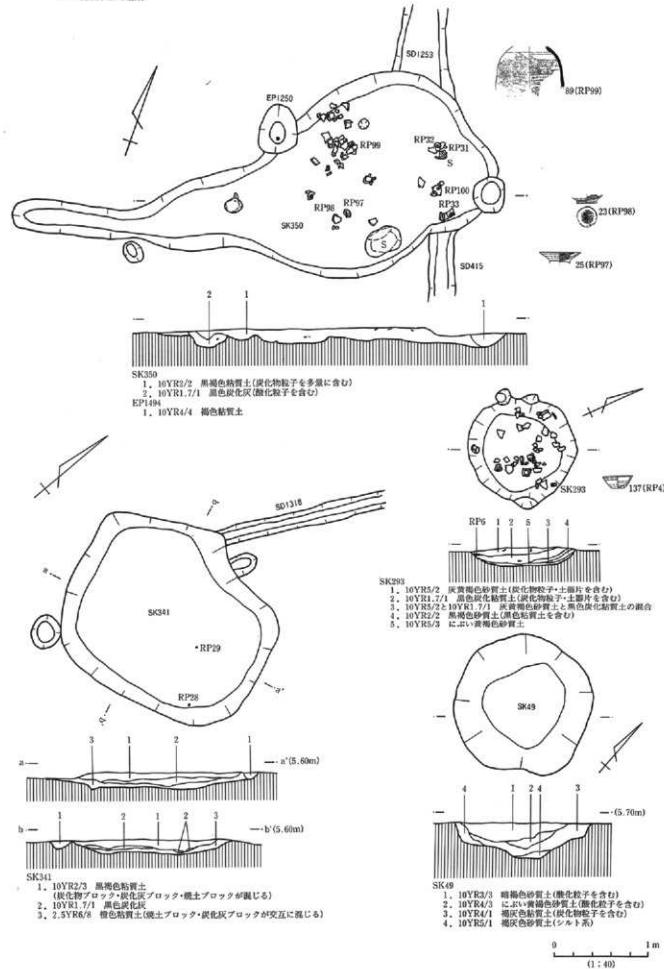
S K341(第10図) B-5グリッドに位置する。平面は横丸方形で長軸2.5m・短軸2.2m、深さ17cmを測り、C類に属する。覆土は3層からなり、焼土ブロックが混入したF1層とF3層の間に炭化灰のF2層をはさむ。土壤内での焼成痕跡と窓れる。須恵器壺(37)と須恵器高台付壺(74)が出土しているが、遺物の出土量は少ない。

S K293(第10図) D-11~12グリッドに位置し、長軸1.23m・短軸1.14mの規模を持つA類の土壙である。赤焼土器壺(137他)がまとまって出土したほか、製塩土器片が21点出土している。

S K49(第10図) 調査区南東部のA~B-18グリッド、S B 1建物跡の東方15mに位置する。長軸1.51m・短軸1.32m、深さ38cmの規模を有する円形の土壙で、A類に属する。覆土は、F2層より、黒色土器壺(17)と赤焼土器壺(111)が出土した。S K49の南方10mには、墨書き文字「一」を有する黒色土器高台付壺(22)が出土したS K180がある。



第9図 SK337・SK321・SK455・SK370・SK314・SK293



第10図 SK350・293・341・49土壤

S K67 T (第11図) 本遺跡域の北西端部に当たる4トレンチの4T-6グリッドに位置する。4T-6~7グリッドは、土壤や溝跡・ピットが集中している地域である。平面は隅丸方形で、長軸1.9m・短軸1.74m、深さ30cmを測る。覆土は、炭化物粒子を含む2層からなり、F2層上面炭化灰層中から129点の製塙土器片(210)が出土した。製塙土器は、調査区全体で759点(遺構内の破片集計による)出土しているが、一個体を構成する破片が一括出土したのはS K67Tだけである。出土遺物には、他に墨書き文字「し」を有する赤焼土器坏(113)等があり、総数は907点に上る。

S K75 T (第11図) 4トレンチ4T-6グリッド、SK67Tの南方2mに位置する。南半が調査区外に係るため全形は確認されない。覆土は4層からなり、F2層から赤焼土器坏(134、144、145、146)がまとまって出土した。

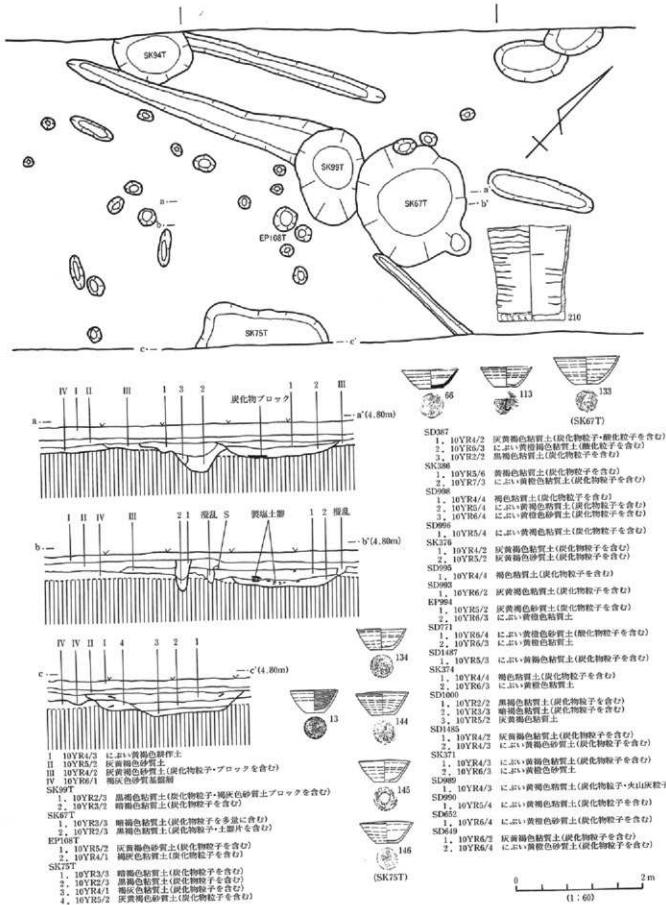
3 溝状遺構

今回検出された溝状遺構群は、最も溝跡が集中するF~L-2~7グリッド(A区)を中心に、その南方J~K-6~8グリッド(B区)、A~E-1~4グリッド(C区)、A~E-6~8グリッド(D区)の4つの区画より構成される。また、溝跡の走行方向によって1~5類の類別が可能であった(表2参照)。1~3類は南北走行の溝跡である。1類は真北より10°前後東方に傾く方向で、2類は真北より西方に20°前後傾き、3類は真北より西方への傾きが10°前後の溝跡である。4~5類は東西走行の溝跡で、5類は4類よりも約20°南に傾く。1~3類は、その切り合い関係から1→2→3の変遷があったものと推察される。A区は1~3類の溝跡が切り合い、B区は4類、C区は2類、D区は3類の溝跡が中心である。以下、A区の状況について概述する。

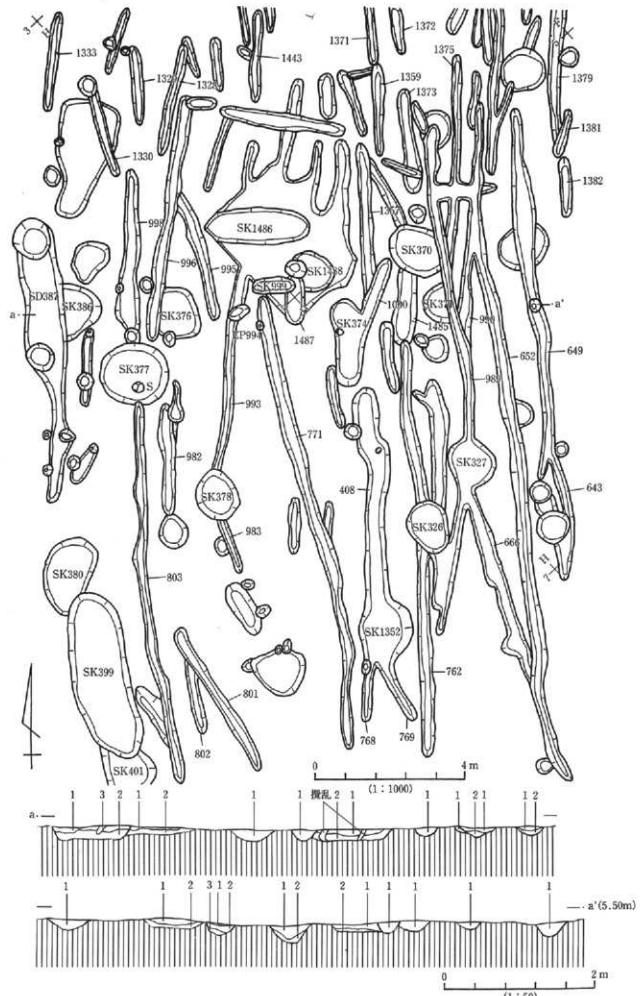
A区溝状遺構(第12図) 東西35m、南北25m程の規模を持つ。A区には1~3類の溝跡が重複する形で検出され、3時期の変遷が認められた。1類は、SD996・993・600等によって構成され、長さ2~9m、幅25cm前後を測る。2~3類の溝跡との重複によって断片的に検出された溝跡が多い。2類は、SD336・771・666等によって構成されるが、この類に属する溝跡は少なく、溝跡群として機能していたかは疑問が残る。ただし、C区の2類溝跡群(S D1253・1255・1256・1257他)は、ほぼ等間隔で整然と平行配置されている。3類は、SD691・693・695・562・700・803・408・652他、約20条の溝跡によって構成される。長さ10~20m前後、幅30cm程度の溝跡が主体であるが、溝跡の間隔は、西側で約3mであるのに対して、東側では約2mと狭くなる。SD387やSK399付近を境にして東西に区画が分かれていることも考えられる。

次に、まとまった遺物を出土した特徴のある溝跡について、挿図に從って概述する。

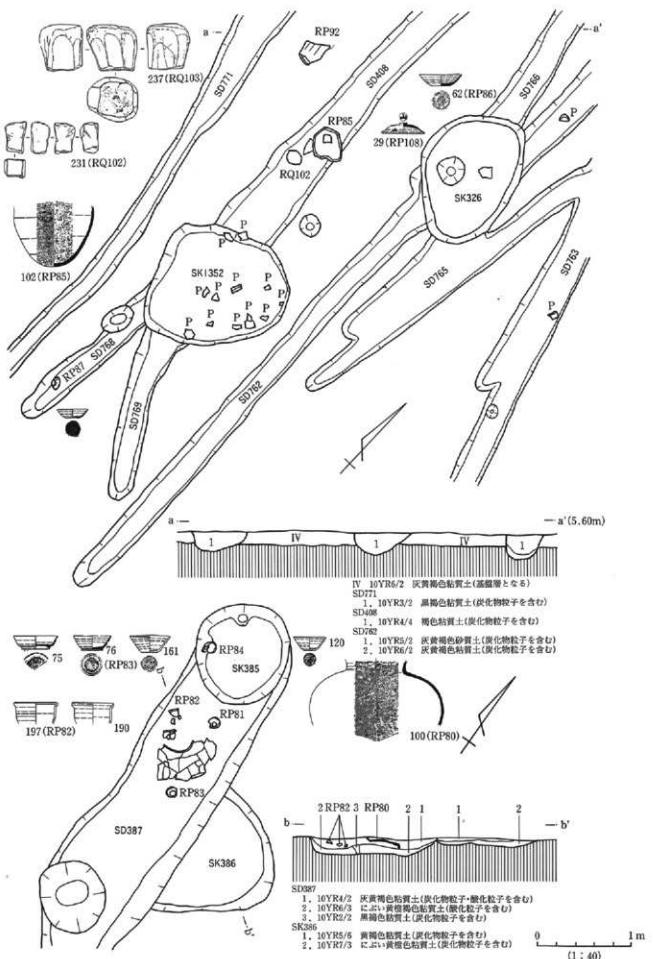
S D408 (第13図) A区溝状遺構群のほぼ中央、H-5~6グリッドに位置する。南方をSK1352に切られ、さらにその先に、SD408が枝分かれした形でSD768とSD769が続く。長さ5.7m・幅0.5m、深さ13cmの規模を有し、1類に属する溝跡であるが、他の溝跡と比較するとやや幅が広い。この溝跡からは、須恵器壺(102)とともに、ヘラ切り須恵器坏(62)、砥石2点(231、237)が一括出土している。



第11図 SK67T・99T・75T土壤



第12図 溝状造構(E~Hグリッド)



第13図 SD408-771-762-387溝跡

S D387(第13図) H=1~3~4グリッドに位置し、S K386を切り、S K385に切られる重複關係を持つ。長さ6.43m・幅0.72m・深さ18cmの規模を有する。方向では3類に属するが、他の溝跡群とは明らかに異なる形態を呈している。出土した遺物は、須恵器壺(100)をはじめ、須恵器高台付壺がへり切り・糸切り各1点(75、76)、赤焼土器の壺(161)・小壺(190)・瓶(197)、釦塗土器片34点と多様である。

S D 336(第14図) I-1~3グリッドに位置し、S D 387の6m南方にある。西方をX 338に接し、南端をS D 562に切られる。長さ9.1m・幅0.34m、深さ19cm規模を有する。覆土は2層からなるが、1層上面から須恵器壺の破片が溝跡を埋め尽くすように大量に出土した。当初、一括してR P 2と登録したが、後に四耳壺(91)・壺(93)・壺(95)の3個体分の土器片が混在していることが確認された。また、製塙土器片が43点出土している。S D 387の出土状況とともに、この付近で製塙作業が行われた可能性を示唆しているといえる。

S D927 (第14図) I～J-3グリッドに位置する。西方をSD562に切られ、その先にSD336が走行している。方向は2類に属するが、長さ1.4m・幅0.73mと土壤に近い形態を呈する。外面庇被りの須頭器溝(88)がほぼ全形の状態で出土した。

S D404(第14図) J-2グリッドに位置し、北方はS X338に接する。長さ1.74m・幅0.53mの小規模な溝跡であるが、漆の付着した壺(124)・甕(188、189)等、赤焼土器がまとまって出土している。

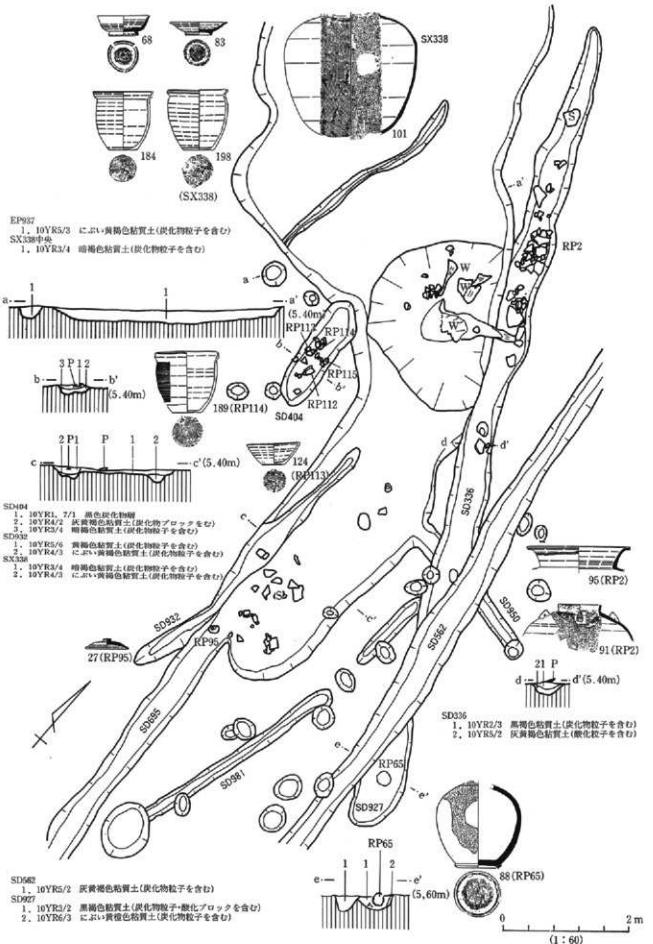
S D464(第9図) J-8グリッド、SK314の北西方1mに位置する。長さ1.43m・幅0.4mを測る。5類に属する唯一の溝跡である。赤焼土器の坏(125)や小壺(191)等が出土している。

4) 性格不明遣機

今回性格不明遺構として登録したのは 6 基あるが、遺物の出土状況等から特徴のある遺構 2 基について概述する。

S X338（第14図） A区溝伏遺構群の北西端部に位置する。西方を S D336に接し、南端は S D695と接続している。自然地形の落ち込みと捉えられ、周囲から雨水等が流入し、湿地化していたものと考えられる。深さは、最深部で約50cmを測る。出土遺物には、須恵器のヘラ高台付杯（68）、糸切り皿（83）、甕（101）、赤土器甕（184、198）等がある。出土総数は破片計で323点を数え、埴輪片岩34点を含んでいる。

S X43T (第7図) 3トレーナの3T-4グリッドに位置する。東方にS B 2建物跡、北西方には製塙器(211)出土のS K 44Tが近接する。長軸4m・短軸3.6mの規模を有し、大型の土壤あるいは竪穴住居跡とも捉えられる検出状況であった。出土した遺物は、破碎集計で420点以上に上り、赤土焼器窯(105、106、163、164他)、甕が中心である。製塙器器具も25点を数えた。赤土焼器窯の中に、灯明類に転用されたものが1点(164)確認された。他に刀子2点(228、229)出土している。



第14図 SD336・404・927・溝跡・SX338

表1 北目長田遺跡遺構觀察表(1) 土壙

記録番号	グリッド	平面形態	度			出土遺物	調査番号
			度	幅	(m)		
SK49	A~B-18	円形	1.51	1.32	0.38	17,111	第10回
SK180	A~B-20	楕円丸形	1.31	1.14	0.48	22	
SK293	D-11~12	楕円丸形	1.23	1.14	0.19	137	第10回
SK295	B-16	円形	1.36	1.22	0.26	16	
SK297	A~B-9~10	不整備円形	2.23	1.81	0.24	148	
SK298	B~C-9	不整備円形	(2.33)	(0.80)	0.25	186,303	
SK300	B~C-9	円形	1.01	1.00	0.22		
SK301	C~S-9~10	楕円形	0.82	0.64	0.11	167,158,159	
SK304	D~S-10	円形	1.62	1.40	0.29	158,179	
SK306	B~C-S~9	楕丸丸形	1.49	1.40	0.18	118	
SK307	C-6	楕丸丸形	1.34	0.60	0.20		
SK311	H-1~9	円形	1.59	1.43	0.21		
SK313	I~S~9	楕丸丸形	1.89	1.60	0.15	160	
SK314	J~S	長方形	2.71	1.23	0.27	18,19,149	第9回
SK315	I~8	円形	1.54	1.54	0.28	1	
SK316	J~7~8	楕丸丸形	1.10	1.00	0.24		
SK319	L~6	椭円形	1.50	1.19	0.26	47	
SK321	J~6~7	椭円形	2.50	1.60	0.36	24,159,151,152,153,181	第9回
SK322	J~7	不整備円形	2.58	1.69	0.29		
SK329	F~6	円形	1.74	1.71	0.21	2,3,4	
SK327	I~3	楕丸丸形	1.60	1.24	0.20	112,114,119,154,155,156,168	第9回
SK349	J~5	楕丸丸形	1.60	1.50	0.24	12,104,122,136	第8回
SK341	B~5	楕丸丸形	2.56	2.20	0.17	37,74	
SK349	D~2	円形	1.48	1.32	0.18	157	
SK265	D~1	長方形	5.13	0.74	0.17	23,25,28,258,296,302	第10回
SK364	E~4	椭円形	3.82	2.21	0.45	46,193	
SK270	G~5	楕丸丸形	1.69	1.22	0.23	11,115,116,185	第9回
SK374	G~H~5	椭円形	3.30	0.72	0.14	175,177	
SK378	I~5	円形	1.31	1.16	0.21	194	
SK383	I~4	椭円形	1.39	0.80	0.19	65	
SK385	H~3	円形	1.03	1.00	0.19	120	
SK390	G~H~1	椭円形	2.54	1.50	0.32	135	
SK391	J~4	椭円形	1.94	1.32	0.23	49	
SK399	I~J~5	長方形	4.59	1.59	0.20	16,108,182,202,240	第8回
SK400	K~5	円形	2.51	1.92	0.25	58,103,117,147	第8回
SK401	J~6	椭円形	1.24	1.22	0.13	270	
SK405	I~8	椭円形	2.10	0.63	0.20	50,51,55,69,167	第9回
SK999	H~4	長方形	1.18	0.43	0.13	82	
SK1468	H~G~4	長方形	2.86	0.94	0.22	109,110,296	
SK1474	3T~4	楕丸丸形	1.60	1.50	0.21	112	第7回
SK1577	4T~6	楕丸丸形	1.90	1.74	0.30	66,113,132,210	第11回
SK1577	4T~6	不整備形	2.10	0.70	0.33	13,134,144,145,146	第11回
SK997	4T~6	椭円形	1.52	1.08	0.47		第11回

表2 北目長田遺跡造詣器類表(2) 溝跡

分類	登録番号	グレーフ	方 向	規 格 (mm)	出 土 遺 物	伴 団 番 号	
A-1	SD0401	I-2	N-19'-E	1.76	6.53	0.15	124,168,189
	SD0964-951	I-1-J-3	N-11'-E	5.50	0.20	0.05	
	SD0966	K-4	N-2'-E	4.73	0.12	0.09	
	SD1328	G-3	N-13'-E	2.99	0.23	0.12	第12回
	SD1398	G-H-3-4	N-12'-E	6.50	0.31	0.16	第12回
	SD1363	G-4	N-7'-E	2.30	0.23	0.07	
	SD0993	G-H-4-5	N-6'-E	8.73	0.24	0.08	第12回
	SD0786	N-1	N-18'-E	8.00	0.20	0.07	第61回
	SD1354	G-4	N-14'-E	6.95	0.22	0.14	
	SD1395	E-F-4-5	N-15'-E	4.56	0.21	0.05	
	SD1393	E-F-4-5	N-10'-E	7.56	0.24	0.08	
	SD1389	E-5	N-9'-E	1.82	0.20	0.09	
	SD1063	H-5	N-12'-E	4.80	0.33	0.19	
	SD0699-641	F-G-6	N-18'-E	3.86	0.20	0.05	
	SD0667-629	F-G-6-7	N-11'-E	9.16	0.30	0.10	
	SD0600	F-G-7-8	N-5'-E	8.34	0.40	0.05	
	SD0601	I-1	N-18'-W	9.00	0.20	0.19	91,193,35,366
	SD0697	I-1-J-3	N-25'-W	1.46	0.73	0.23	第14回
	SD1330	H-3	N-18'-W	2.23	0.22	0.07	第12回
	SD0995	H-4	N-18'-W	3.42	0.24	0.12	第12回
	SD0771	H-1-I-5-6	N-15'-W	12.20	0.34	0.10	第13回
	SD0769	H-1-I-6-7	N-28'-W	1.62	0.30	0.13	第13回
	SD0666	H-6-7	N-15'-W	4.50	0.53	0.11	第12回
A-2	SD0691	I-3	N-18'-W	5.61	0.21	0.15	
	SD0692	K-2-3	N-7'-W	6.40	0.33	0.08	
	SD0694	K-2-3	N-7'-W	6.10	0.42	0.13	
	SD0693	J-1-J-2-4	N-7'-W	15.41	0.23	0.11	
	SD0679	K-1-L-2-8	N-9'-W	5.20	0.30	0.17	
	SD0695	K-3-K-4-4	N-7'-W	6.94	0.42	0.09	第14回
	SD0562	I-1-K-2-5	N-6'-W	19.01	0.44	0.28	第14回
	SD0707	H-1-K-2-5	N-0'	21.49	0.32	0.18	
	SD0387	H-1-J-3-4	N-9'-W	6.62	0.22	0.15	75,76,100,161,190,197
	SD0992	H-1-J-4	N-9'	4.14	0.40	0.08	第12回
	SD0893	H-1-J-4-6	N-7'-W	10.12	0.21	0.11	第12回
	SD0892	H-1-1-5	N-5'-W	2.92	0.39	0.03	第12回
	SD1357	G-4-5	N-3'-W	3.91	0.24	0.10	第12回
	SD0406	H-5-6	N-3'-W	5.70	0.50	0.13	29,62,102,231,237
	SD0762	G-1-J-5-7	N-14'-W	11.00	0.30	0.15	第12回
	SD1089	F-G-6-8	N-5'-W	8.48	0.24	0.14	第12回
	SD0655	G-H-5-7	N-18'-W	18.30	0.20	0.15	第12回
	SD0649	G-H-5-7	N-17'-W	9.83	0.46	0.20	第12回
B-1	SD0649	J-1-K-7	N-4'-E	5.91	0.30	0.24	
B-3	SD0765	J-1-K-6	N-17'-W	3.51	0.70	0.20	56
B-4	SD0696	I-1-J-2-3	N-18'-W	1.50	0.30	0.04	
	SD0697	I-1-J-2-3	E-6'	4.50	0.54	0.06	
	SD0453	H-1-J-8-8	E-7'-N	8.00	0.32	0.31	第9回
	SD0649	K-1-L-5	E-10'-N	3.20	0.31	0.14	140,200
B-5	SD0469	J-8	E-18'-S	1.43	0.40	0.18	125,191
C-2	SD1253	C-D-1	N-27'-W	2.10	0.49	0.08	
	SD1415	D-1-3	N-39'-W	7.60	0.20	0.11	
	SD1255	C-1	N-21'-W	2.50	0.22	0.17	
	SD1256	C-1	N-21'-W	4.40	0.20	0.19	
	SD1256	B-1	N-29'-W	2.61	0.29	0.08	
	SD1278-1290	B-C-G-2-2	N-32'-W	7.50	0.23	0.12	
	SD1257	B-1	N-24'-W	2.99	0.30	0.05	
	SD1098	B-2-3	N-32'-W	4.99	0.24	0.15	
	SD1271	B-2-4	N-32'-W	11.20	0.23	0.09	
	SD1172-1277	A-B-2-4	N-32'-W	9.82	0.23	0.09	96,97
C-3	SD410-1266	B-C-1-2	N-9'-W	8.90	0.21	0.10	162,246
D-3	SD1210	C-1-2	N-11'-W	9.50	0.24	0.20	
	SD1218	C-1	N-11'-W	3.17	0.28	0.09	
	SD439	B-C-9-7	N-12'-W	6.52	0.23	0.11	
	SD438	B-C-7	N-13'-W	2.31	0.23	0.12	

5 出土遺物

遺物の分布

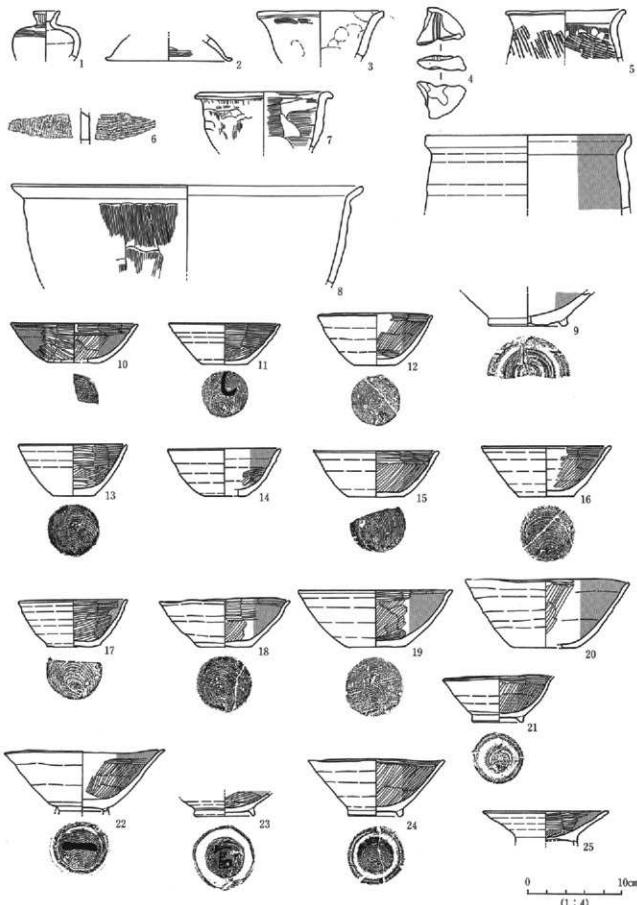
本調査で出土した遺物は整理箱にして115箱を数える。その内訳は土器が113箱、土製品1箱、石製品1箱で、圧倒的に土器が多い。土器の種別では、土師器・黒色土器・須恵器・赤焼土器・綠釉陶器・青磁・染付・中世陶器・製塙土器等である。器種別では蓋・壺・瓶・皿・壺・甕・鍋・擂鉢・バケツ型土器等である。そのほかの遺物では紡錘車・磁石・彈・土鏡・刀子が出土している。ここでは、これら土器を中心に分類し述べる。分類の基本は器種を主とし、(A)蓋、(B)壺、(C)皿、(D)壺、(E)甕、(F)鍋、(G)他とした。大別は1底部の切り離し別(技法)2 形態別(法量)3 形状別(形)とした。これらは各器種毎に分類の基準を持つものと考えるが、(B)の壺を基本とした。大別した基準を基に土器の種別毎に以下に記す。

(1) 土師器 (第15図1~8)

土師器には小壺・高杯・壺・甕・甕・瓶の器種がある。小壺(I)はS K315土壤F 4からの出土である。上半部のみで、口縁部の径が28mm、高さ14mmを計る全面にヘラケズリ調整が施された小型の壺形土器である。2はSD50T溝跡から出土した高杯の脚部と考えられる。内面をヘラミガキ後黒色化が施されている。3は小型の鉢形土器と考えられる。S K330土壤F 1層から出土した器面に刷毛目形状や、指頭による器面成形痕が残る。胸部分は綾やかに立ち上がり、口縁部で急激に外反する。口唇部は雑な作りであり、脚部の口唇にも観察される。4は用途不明の土器として示した。断面を台形とし、一面には3本の条痕で十字になる。胎土は3の土器と近似していることから同一個体と考えられる。5・6は蝶形土器である。5は口縁部がクの字状に屈曲し、器外側は頸部から胸部分にかけて幅3.5cmの刷毛目が斜位に整形され、内面は横位の刷毛目が施されている。6は翼部で、内外面とも刷毛目による器面調整が認められる。7は小型の鉢形土器である。口唇部を細く折り曲げ、内外面とも細かな刷毛目による器面調整が行われている。8は形状から瓶形土器とした。口唇部はクの字状に外反し、頸部から胸部分に移行する部分には折れによる整形が、外面上には細かな刷毛目が認められる。

(2) 黒色土器 (第15図9~25)

黒色土器には甕、壺、高台付壺の器種がある。9は内面を黒色処理が施された甕形土器である。器上部と底部である。上半部はS D42T溝跡から、底部はトレンチ調査での出土である。底部の出土はS D42T溝跡の上面からの出土で同一個体と考えた。器内面は輪郭整形後ヘラミガキ、黒色化処理が施されている。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、高台を付す。10は両面とも黒色処理された土器で、細かなヘラが認められる。同部中位に綾やかな丸みを持ち、口縁に至る。内面を黒色化処理された内黒壺は技法、形状等によりいくつかの形態に分類することができる。11から20は無台の环形土器である。底部の切り



第15図 出土遺物(1)土師器・黒色土器

表3 北目長田遺跡遺物観察表(1)

調査番号	種別	器種	計測値(mm)	断面切	調査方法		出土地点・登録番号	備考		
					内面	外面				
15	1 土師器	小瓶	28	7	ケズリ		SK315F4			
2		高杯	135	6	ヘラミガキ	ナデ・ケズリ	SD06TF1	内面黒色化		
3		鉢	136	8	削刮痕	ナデ・削刮痕	SK320F1			
4		不明					SK320F1	十文字に3本の矢張		
5		要	128	5	ハケメ・指痕	ハケメ	2T-15B			
6				5	ハケメ	ハケメ	4T-7II			
7		鉢	148	9	ハケメ・指痕	ハケメ	4T-7II			
8		盤	250	8	ナデ	ハケメ	1T-9-III			
9	黒色土器	盤	258	85	9 ヘラ切	ハケメ	SD47TF-3T-15B, 3T-4	内黒		
10			134	54	41	6 ヘラミガキ	ヘラミガキ	SK268F2	RP19	
11			119	48	43	5 楔切	ロクロ・ナカナ	ロクロ・ナカナ	内黒・墨書き「し」	
12			122	47	52	5 楔切	ヘラミガキ	ロクロ	SK320F1	RP15, 16
13			115	45	54	8 楔切	ヘラミガキ	ナナデ	SK75TF1	内黒
14			120	46	50	5 楔切	ヘラミガキ	ロクロ	SK94TF1	内黒
15			134	60	48	5 楔切	ヘラミガキ	ロクロ	SD413F1	RP23
16			138	58	53	5 楔切	ヘラミガキ	ロクロ	SK309F1	内黒
17			116	58	49	5 楩切	ヘラミガキ	ロクロ・ナナデ	SK96F2	内黒
18			140	57	51	4 楩切	ヘラミガキ	ロクロ	SK314F1	RP41
19			164	62	60	7 楩切	ヨロコ・ナカナ	ヨロコ・ナカナ	SK314F1	RP29
20			175	70	72	5 楩切	ヘラミガキ	ロクロ・ナナデ	SD039F1	RP24
21	高台付环		119	55	47.5	5 楩切	ヘラミガキ	ロクロ・ナナデ	I-2II	内黒
22			196		5	4 楩切	ヘラミガキ	ロクロ	SK160F1	RP164
23			66		5	4 楩切	ヘラミガキ	ロクロ	SK350F1	RP98
24			145	59	60	5 楩切	ヘラミガキ	ロクロ・ナナデ	SK321F1	RP51
25	高台付皿		134	32	4	4 楩切	ヘラミガキ	ロクロ	SK320F	RP97
16	須恵器	皿	154		5	ロクロ	ロクロ	1-2III		
26			136	44	9	ロクロ	ロクロ	SD065F1	RP95	
27			168	38	8	ロクロ	ロクロ	E-4III		
28			146	35	4	ロクロ	ロクロ	SD408F1	RP106	
29			176	37	9	ロクロ	ロクロ	I-4II	黒帯外側及び底部「山」	
30			134	34	9	ロクロ	ロクロ	EP406F1		
31			158	49	8	ロクロ	ロクロ	南区		
32			134	28	5	ロクロ	ロクロ	SK101TF1	RP120	
33			168	41	7	ロクロ	ロクロ	G-7III	遮光室窓成平十分	
34					8	ロクロ	ロクロ	E-4II		
35			134	29	5	ロクロ	ロクロ	E-4III		
36			132		5	ロクロ	ロクロ	SK341Y		
37			146	76	49	9 ヘラ切	ロクロ	EP556F1	RP63	
38			133	80	34	5 ヘラ切	ロクロ	SK325F1	RP106	
39			142	90	34	3 ヘラ切	ロクロ	D-6II	墨書き「十」	
40			130	80	33	3 ヘラ切	ロクロ	I-4IV		
41			124	74	35	5 ヘラ切	ロクロ	南区		
42			115	74	41	9 ヘラ切	ロクロ	L-5II	墨書き「上」	
43			137	90	37	4 ヘラ切	ロクロ	L-5II	墨書き「上」	
44			132	80	40	5 ヘラ切	ロクロ	3T-15II		
45			130	78	31	5 ヘラ切	ロクロ	SK364F	内面黒色撥水着	
46			136	72	35	4 ヘラ切	ロクロ	SK318F1	RP62	
47			130	72	40	4 ヘラ切	ロクロ	SK368Y		
48			126	62	36	9 ヘラ切	ロクロ	SK391F1	墨書き「一」	
49					86	5 ヘラ切	ロクロ	SK455F2	RP45	
50			134	60	29	5 ヘラ切	ロクロ	SK456Y	ヘラ起こし痕	
51										

離し技法は回転糸切りで口縁径と底部径の差が大きく100mmをこえる大振りの土器である。19は底部から口縁にかけてやや丸みをもちらがら立ち上がり、口縁内面で丸い膨らみをもつ。20は19と同様であるが、器高が高く、底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。11から18は底部の切り離しが回転糸切りとなるやや小形の壺である。内面に丁寧なヘラミガキ後、黒色化処理を施している。器形の観察で三様に分けられ、A類：底部から口縁にかけたの立ち上がりが直線的なもの(16)、B類：丸みを持つもの(11~14・18)、C類：口唇部がやや外反するもの(15・17)である。口径、底径、器高の比率から凡そ2:1:1の数値を示す。11の底部には、「しか」の墨書きが描かれている。ひらがら状の墨書きについてはやや無理があると覚えるが筆運びから判斷した。21~24は高台をもつもので、底部の切り離しが回転糸切りである。無台と同様に器形から三様に分け、A類：直線的なもの(24)、B類：丸みをもつものの(21)、C類：口唇が外反するもの(22)に分けた。器の特徴としては粘土精成が粗雑な22と丁寧な21・23・24がある。時期的または、製作者・集団の違い等があるのかは検討が必要と考える。22の土器底部には「一」、23には「富」の墨書きがある。25は高台付皿である。整形と内面のヘラミガキ後による黒色化処理が丁寧である。

(3) 須恵器(第16図~19図・図版10~15)

須恵器には蓋、皿、壺、高台付壺、双耳壺、壺、四耳壺、横瓶、甕の器種がある。各器種毎その形態や特徴から数類に分類することができる。

蓋(26~37)は紐部の形状でいくつかに分けた。A類：紐部のつまみ中心が紐部高より高くなるもの(27・28・31)、B類：紐部のつまみ中心が紐部高と同じ高さで、水平となるもの(30・36)、C類：紐部のつまみ中心が紐部高より低くなり、中心が飛び出るもの(29・32・34)、D類：紐部のつまみ中心がくぼむもの(33・35)とに分類した。A類としたものは蓋天井部をヘラケズリ無調整で紐部がやや宝珠形に近い。B類は天井部がヘラケズリ後布撫で整形が認められ、紐部天井が水平となることと、丸くなる36である。C類の29は器面全体に布撫で調整が施され、形状はやや球形となる。紐部の天井には「山」が、器面の四方にも同様の「山」の墨書きが施されており、内面を観として転用している。32・34は土器自体の還元焰焼成が不十分で、酸化焰になる部分が認められる。D類の33は内面を硯に転用している。分類から除いたが、26は短頸壺の蓋と考える。器面に緑灰色の自然釉が掛かる。

壺(38~78)には無台と高台付の壺があり、底部の切り離し技法にヘラ切りと糸切りがある。ここではヘラ切りをA類(38~57)、糸切りをB類(58~67)とし、器の法量が口径と底径の差が小さいもの(1)と、口径と底径の差が大きいもの(2)とし、断面形の形状が底部から口縁にかけて直線的になるもの(a)、丸くなるもの(b)、口縁が外反するもの(c)に分けた。

A-1-a類(39・43~45)

壺身の器高が低く、底部からの立ち上がりが直線に近い。43・44には「上」の墨書きが底部に描かれている。書体から同筆と観察される。

A-1-b類(40・42・46~50)

口径と底径の差が少なく、底部からの立ち上がりが丸みを持つ。40には「十」の49には「一」

の墨書きが、46は内面を黒色のススが付着しており、燈明に転用されたものと考える。

A-1-c類(41・51~54)

壺身の器高が低く、口唇部が外反するもので、底部にヘラ起こし痕を明瞭に残す。53には「十」の墨書きがある。

A-2-a類(55・56)

壺身が深く、底部から直線的に立ち上がる。55はS D455溝跡床面からの出土で、ヘラ起こし痕を明瞭に残している。

A-2-b類(38)

器高が高く、底径が口径に比して小さい。

A-2-c類(57)

b類と同様であるが、口唇が外反するものである。

底部の切り離しが回転糸切りとなるものをB類とし、ヘラ切りと同様な形態で3つに分けた。

B-2-a類(59・60・62)

底径が小さく、口径はやや大きめ直線的な立ち上がりを呈す。

B-2-b類(61・63・64)

底部からの立ち上がりが丸みを持つ。62には「瀬」、63には「呪」の墨書きが底部に描かれている。

B-2-c類(58・65~67)は口縁で外反するものである。66は還元焰が不十分で赤色化となり、切り離しが丁寧で明瞭な糸切り痕を残す。

高台付壺にはヘラ切り離し後高台を付した68~75・77と、回転糸切り離し後高台を付した76がある。壺身の浅い68・75と深い69・70・73に区別出来る。底部から口縁まで直線的に立ち上がり、断面形が皿形や箱形になる。糸切りは丸みを持ちやや球形を呈す。

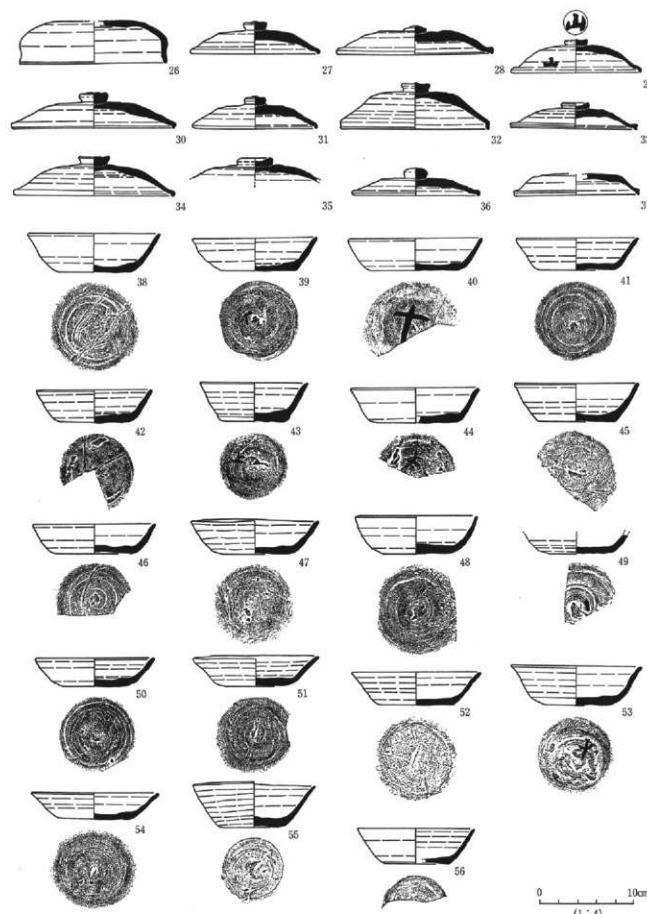
坪形土器で特殊な器形を示す双耳壺が出土している。高台付壺にヘラケズリ痕が明瞭な耳を付し、安定した形である。底部の切り離しが糸切りで底部から口縁へ丸みを持った立ち上がりである。79~81は双耳壺の耳部である。全面にヘラケズリによる調整痕を残す。

皿は4点(82~85)図示出来た。皿はすべて底部の切り離しが回転糸切りで、82・83は硯に転用、84には口縁に油脂が付着している。

壺は6点出土した。小型の壺(86・87)と大型(88~93)の壺である。88は長頸壺と考える。91は四耳壺である。肩部4カ所に幅1.6cm、長さ3.8cmの耳が付し、耳には径6mmの穿穴が施されている。

甕(94・95・99~102)は外表面を条線状叩き、内面に青海波アテ痕が観察される。94・95は甕の口縁部で、頸部に青海波の条線が引かれている。96・97は鳥形土器である。羽根の条線と胸部羽の模様が施されている。平成6年度に調査が実施された堂田遺跡で出土したものと同類である。98は横瓶である。閉鎖部を明瞭に観察される。

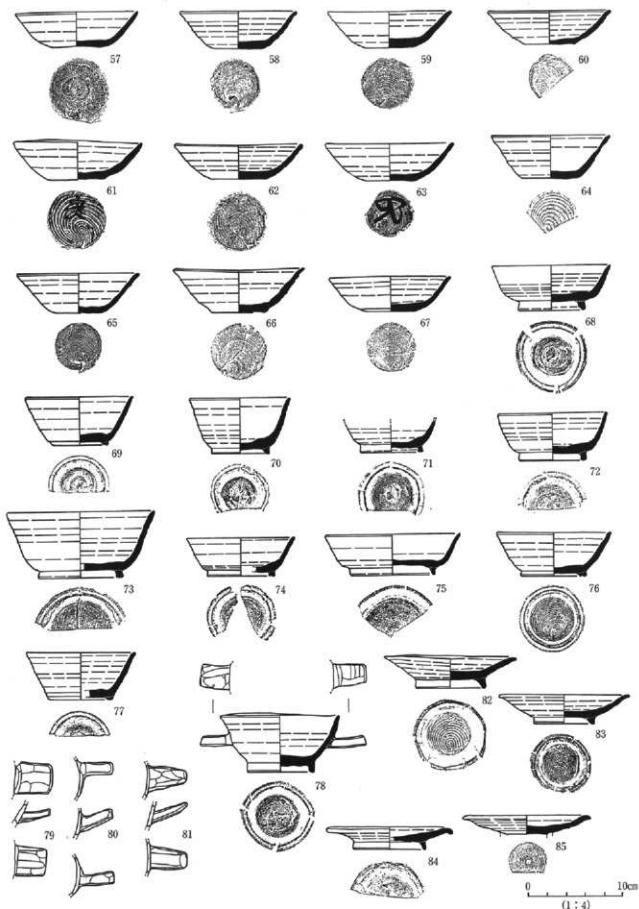
III 北目長田遺跡



第16図 出土遺物(2)須恵器蓋・須恵器坏

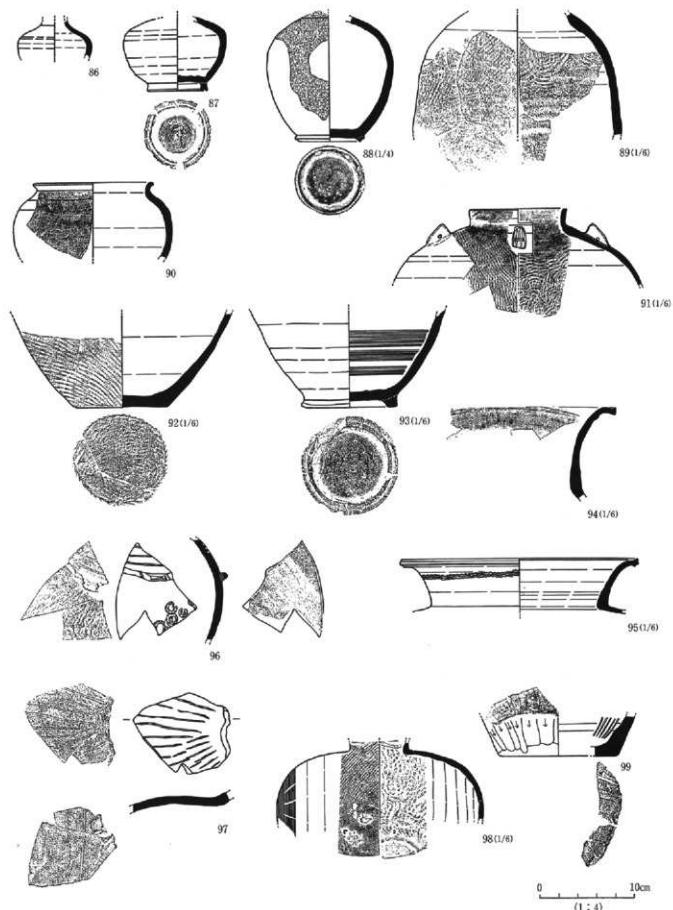
- 30 -

III 北目長田遺跡



第17図 出土遺物(3)須恵器蓋・須恵器坏

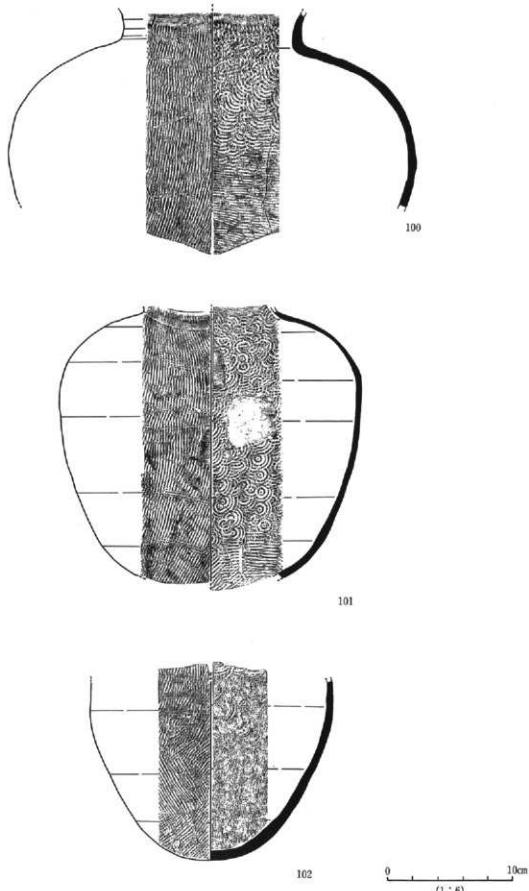
- 31 -



第18図 出土遺物(4)須恵器壺・須恵器甌

表4 北目長田遺跡遺物観察表(2)

探査 番号	遺物 種別	種類	剖面切 断面			調査方法		出土地点・登録番号	備考
			口径 底径 高さ	厚さ	内面 外面	内面 外面			
16	須恵器	杯	138 72 34	3 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD129AY	ヘラ起し底	
			140 75 42	4 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	GT-1B	ヘラ起こし底・崩部+	
			136 71 38	3 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	北区III	ヘラ起し底	
			130 64 47	4 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK455Y	RP49	ヘラ起し底
			125 70 37	8 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD068F1	RP49	
			130 54 37	4 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD068F1	RP49	
17	須恵器	縁付	124 54 39	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK409Y	RP49	
			132 51 37	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK703F2	RP105	
			130 54 35	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK100TF1	RP122	
			138 66 42	6 素切	ロクロ	ロクロ	SK100TF1	RP121	萬葉「浪」
			136 56 35	3 素切	ロクロ	ロクロ	SD408F1	RP96	
			138 52 39	5 素切	ロクロ	ロクロ	I-3H	萬葉「呪」	
			127 37 45	4 素切	ロクロ	ロクロ	4T-5H		
			130 50 42	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK383F		
			140 58 44	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK657F2	鏡元鉢底成不十分	
			128 32 37	3 素切	ロクロ	ロクロ	H-4H	RP93	
			126 58 47	5 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SX338F1		
			114 60 51	4 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK455Y	RP49	C-7H
18	縁付杯	蓋	108 61 58	5 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	EP464Y	RP37	ヘラ起し底
			64	4 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	A-1H		
			116 70 59	4 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	A-5H		
			138 90 69	4 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK341F2		
			116 66 41	6 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD387F2		
			143 90 43	4 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD387F2	RP93	
			122 58 46	5 素切	ロクロ	ロクロ	北区II		
			116 66 50	5 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	I-3H	RP64	
			128 71 61	5 素切	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ		
							3T-21H		
							E-4H		
							ヘラケズリ		
19	双耳杯	蓋					B-4H		
							SK369F1	RP101	周に軋用
							SX338F1		周に軋用
							EP469F1		口横に鋸削
							A-7H		
							SD336F1		
							SD336F1	RP2	
							SD336F1		
							SD336F1	RP2	
							SD336F1		
20	小壺	蓋	64	6 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	B-7H	RP1	
			98 200	11 ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD297F1	RP65	外周灰覆り
			8	ヨリヨリ内凹テク	ヨリヨリ斜面テク	SK350Y	RP99		
			124	5 ロクロ	ロクロ	EP414F1			背面波文
			157	8 ヨリヨリ斜面テク	ヨリヨリ斜面テク	SD336F1			
			94	7 ヘラ切	ロクロ	ヨリヨリ斜面テク	3T-3H		底部細目面
			103	8 ヘラ切	ロクロ・斜面テク	SD336F1	RP2		
			9	アテ	ロクロ	北区III			縦細いよる背面波文
			504	10 心円内テク	ロクロ	SD336F1	RP2		側面青釉波文
			7	ハケメ	タタキ	SD127F2			竹管による網穴、穿孔
			8	ロクロ	タタキ	SD127F2			羽輪標下網引き
21	滴瓶	蓋	94	8 ヨリヨリ青釉面テク	ヨリヨリ斜面テク	A-1H			
			125	10 ヘラ切	ハケメ	北区II			
			11	アテ	格子目タタキ	SD387F1	RP50		
			425	青釉波テク	格子目タタキ	SX338F1			内面青釉波承継状
22	大甌	蓋	216	青釉波テク	格子目タタキ	SD408F1	RP95		
			162	青釉波テク	格子目タタキ	SD408F1			



第19図 出土遺物(5)須恵器

(4) 赤焼土器 (第20~24図、図版15~22)

今次の調査で出土した遺物の中で最も出土量が多い遺物である。全体出土量の約76パーセントを示し、遺跡の性格を表す。器種は供食具の壺と煮沸具を示す壺と壺である。

壺は須恵器と同様に3形態に分けることができ、図示点数が多いことから須恵器で分類した基準を基にして主な壺について記述する。

壺(第20~22図、図版15~19)

B-2-a類

(106・107・109・113・115・118・120・124・127・132・136・143・144・147・151・152・155・158・160・163) 口径が118~152mm、底径が47~59mm、器高が48~52mmに計測される壺である。底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる一群で、器厚は4~7mmでやや厚いものもある。器面に明瞭なロクロ痕を示している。106の口縁下ではロクロによる器面調整で肉厚になる段を作り出している。132の体部には墨書き、113は底径・口径・器高が1:2:1となり、均整のとれた器形を呈している。底部にはひらがなの「し」状の墨書きが書かれており、製塙土器出土のS K67T土壤F2層から検出され、製塙土器の時期を示唆できる。器面は2次加熱を受け赤色化する。118はやや大振りで色調が茶褐色を呈し、重量感がある。S K301土壤F1からの出土である。124には器内面に漆が薄く付着し、136にも内面に付着しており、搔きだしの痕跡を残している。S K340土壤F1からの出土である。

B-2-b類

(103・104・110・111・116・117・119・121~123・126・128・129・142・148・150・154・156・164・166・167・169・170)

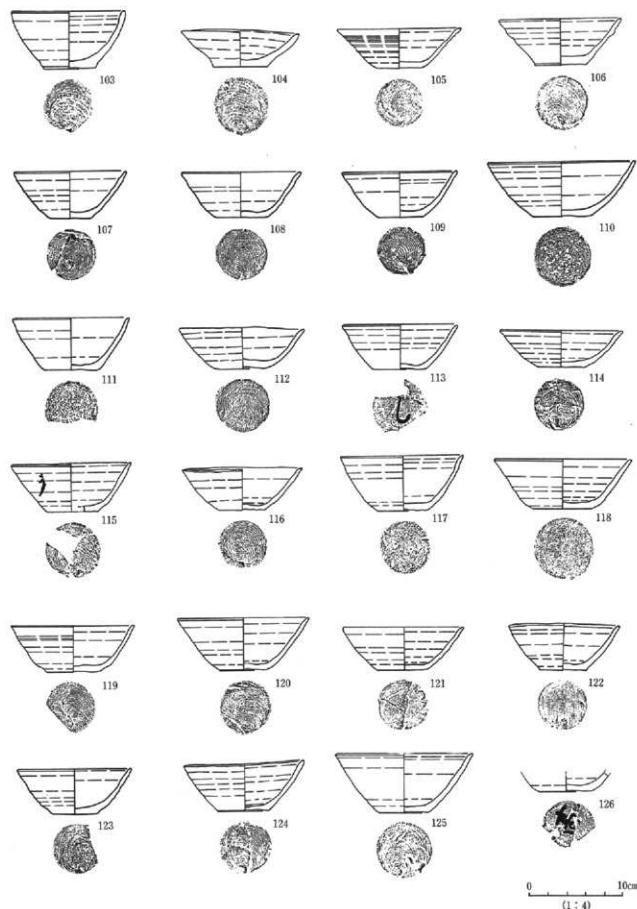
口径が119~158mm、底径が46~68mm、器高が39~66mmに計測される壺である。底部から口縁にかけて丸みを帯びながら立ち上がる一群で、器厚は4~7mmである。器面の調整でロクロ痕を明瞭に残し、器形の大きな壺は碗状になる。104は底径が39mmと小さく、底部から口縁にかけて急激に外反し、器高が低く皿形となるものである。128は茶褐色を呈した焼成が良好で重量感をもつ壺である。S B 2 建物跡E B37T柱穴からの出土でS B 2 建物跡の時期を示す。129の体部には「廣」墨書きが大きく描かれている。164・166の内面には口唇に油脂が付着し、證明に転用されたものと考える。164は器面がいびつで歪みの大きい壺である。

B-2-c類

(105・108・112・114・125・130・131・133~135・137~141・145・146・149・153・157・159・161・162・165・168)

口径が122~159mm、底径が46~66mm、器高が39~65mmに計測される壺である。底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がり、口唇で外反する一群で、器厚は3~6mmである。器面の調整には内外面共明瞭なロクロ痕を残し、口唇端が大きく外反するものもある。112・114・161 烧成時の原元胎が不十分なことから赤色化する。緻密な胎土や堅牢な焼成から須恵器の範疇になると想われるがここでは赤焼土器とした。137には口唇内面に油脂が付着してい

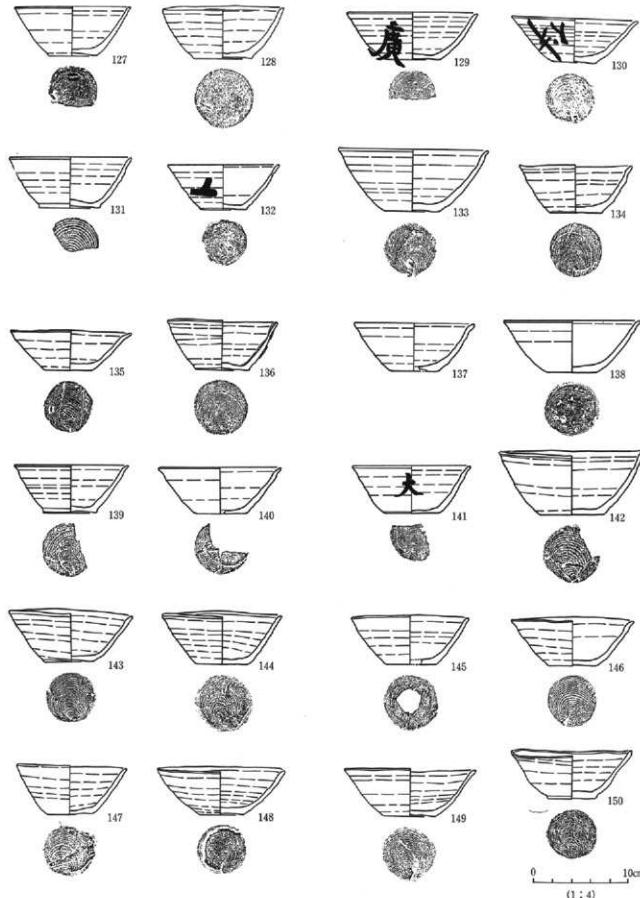
III 北目長田遺跡



第20図 出土遺物(6)赤焼土器器坏

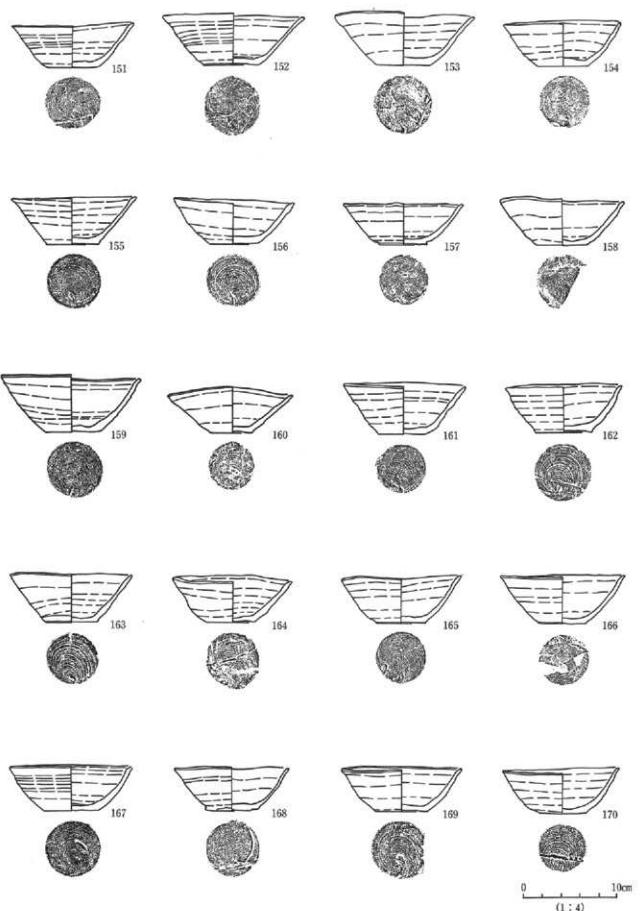
- 36 -

III 北目長田遺跡



第21図 出土遺物(7)赤焼土器器坏

- 37 -



第22図 出土遺物(8)赤焼土器坏

表 5 北日長田遺跡遺物觀察表(3)

編號	種別	屬相	計量數 (m)	底面切	調整技術			出土地点 - 登録番号	備考
					内	面	外		
20	163	南宋土器	坏	121 54 61	7 素切	ロクロ	ロクロ	SK4007F1	RP96
	167			127 54 59	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK4008F1	
	165			132 49 41	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK405TF1	
	166			132 55 48	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK405TF1	
	167			116 44 49	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK301F1	
	168			126 55 49	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK309F1	
	169			123 48 48	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK406F1	RP110
	170			156 61 57	3 素切	ロクロ	ロクロ	SK406F1	RP109
	111			134 58 55	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK406F2	
	112			132 55 44	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK302F1	RP77 遺存不十分
	113			124 57 45	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK407TF2	遺書「し」
	114			131 81 29	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK407F1	
	115			129 56 52	6 素切	ロクロ	ロクロ	SK407F1	遺書不明
	116			128 59 43	6 素切	ロクロ	ロクロ	SK407F1	
	117	黑色土器		131 54 58	7 素切	ロクロ	ロクロ	SK407F1	
	118	赤燒土器		146 62 52	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK305F1	
	119			154 55 49	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK407F1	RP17
	120			140 59 45	5 素切	ロクロ	ロクロ	RK308F1	RP84
	121			129 54 45	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK304F1	RP167
	122			119 51 48	6 素切	ロクロ	ロクロ	SK408F1	RP129
	123			122 48 47	5 素切	ロクロ	ロクロ	SD408F1	
	124			129 58 56	5 素切	ロクロ	ロクロ	SD408F1	RP113 撫付帯
	125			121 55 61	5 素切	ロクロ	ロクロ	SD408F1	
	126			58	7 素切	ロクロ	ロクロ	SD408F1	
	21	127		124 82 51	5 8切	ロクロ	ロクロ	EP207F1	
	128			129 62 54	6 素切	ロクロ	ロクロ	ER307TF	遺書不明
	129			127 57 59	4.5 素切	ロクロ	ロクロ	SN411TF1	遺書「謹」
	130			126 46 47	4 素切	ロクロ	ロクロ	1-3H	遺書「幸」
	131			131 66 53	5 素切	ロクロ	ロクロ	CT-5H	二次焼成灰
	132			129 50 47	4 素切	ロクロ	ロクロ	ET-5H	遺書不明
	133			159 55 65	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK407TF	
	134			120 55 50	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK715TF2	
	135			129 50 42	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK309F1	
	136			118 56 52	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK408F1	RP123 内外側撫付帯、僅存灰
	137			127 59 50	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK309F1	RP4
	138			144 50 54	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK304TF	RP12
	139			122 55 56	5 素切	ロクロ	ロクロ	SD407TF	
	140			130 53 49	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK406TF	
	141			126 58 50	6 素切	ロクロ	ロクロ	ST-14HE	遺書「火」
	142			153 68 66	6 素切	ロクロ	ロクロ	ST-14HE	
	143			132 52 58	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK107F	
	144			156 55 52	6 素切	ロクロ	ロクロ	SK715TF2	
	145			122 54 51	5 不明	ロクロ	ロクロ	SK715TF2	遺傳摩孔
	146			130 52 47	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK715TF2	
	147			116 45 51	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK406F1	
	148			126 45 50	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK307TF	RP11 撫付帯
	149			129 54 50	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK314F2	RP46
	150			128 50 45	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK302F1	RP23
	151	151		130 50 48	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK302F1	RP33
	182			128 59 55	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK312F4	RP54
	153			148 55 52	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK302F4	RP56
	154			125 54 44	4 素切	ロクロ	ロクロ	SK337F1	RP71
	155			133 55 49	7 素切	ロクロ	ロクロ	SK337F1	RP74
	156			128 52 46	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK337F2	RP75
	157			128 50 42	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK340F1	RP96
	158			123 54 45	5 素切	ロクロ	ロクロ	SK330F1	

る。145の底部中心には径25mmの穿孔が外面から作意的に施されている。SK75T土壤F2からの出土である。162には内面に薄く漆が付着している。

壺 (第23・24図、図版19・22)

壺には大型で煮沸形態を示し、丸底(175)、長胴形(176)を呈したものと、平底、丸胴形を呈す(181・188・195・200)である。小型で平底のもの(171~174・182~187・189~195・197~199)がある。外面に煮沸によって煮こぼれたスグが付着している。長胴形をした大型の壺は175・176の2点で、175は外面を格子目状叩き締めとなり、内面のアテ痕は平行条線を呈している。176は器部外面にヘラ切りの痕跡を呈し、内外面共削毛目調整が施されている。小型の壺は口径が150mm前後、底径が70mm前後、器高が140mm前後である。底部の切り離しを174は静止糸切り、他は回転糸切りとし、体部から口縁にかけて緩やかに立ち上がる。口縁部で「く」の字状に外反し、口唇で垂直につまみ立ち、口唇内面には煮沸による炭化物が付着している。

壺 (第23図、図版19・20)

壺は4点図示できた。体部から口縁にかけての破片である。内外面とも明瞭なロクロ整形され、179・180には体部外面に平行条線の叩き目を、内面に同じ条線状のアテ痕が施されている。180には刷毛目痕がある。

(5) 緑釉陶器 (第25図、巻頭図版上)

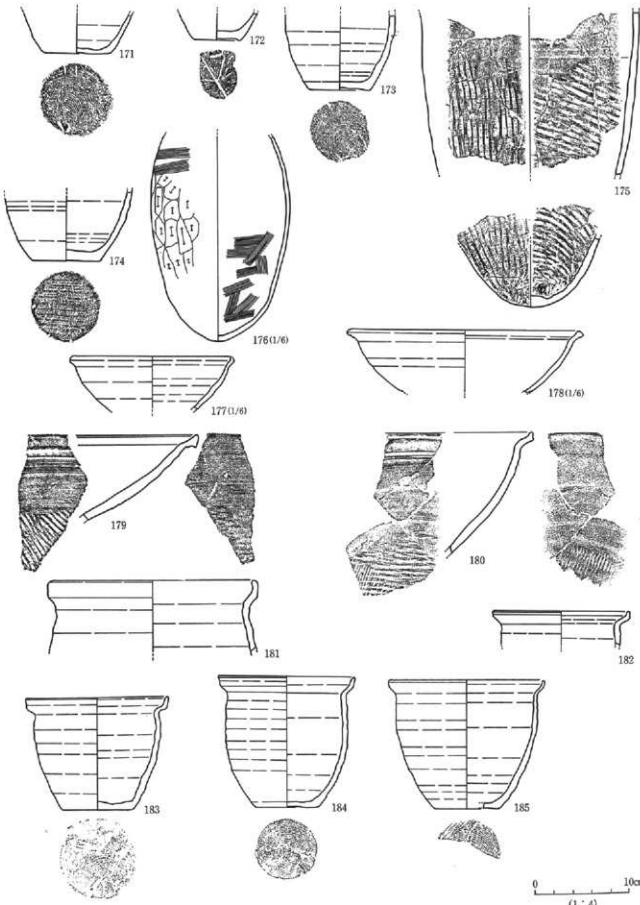
3点出土している。これらは供膳形態としての皿形の器形で、素地は灰色、硬質の須恵器質である。201・202は底部を削り出しによる高台とし、内側縁辺部も削り出し、断面が三日月形となる同一個体である。器形は底部から急激に立ち上がり、口唇で大きく外反する。口縁部は後をもち輪花が必ずしも施している。施釉は濃緑釉を厚く、手持ち掛け釉としている。201は口縁部に2次加熱を受け、施釉が溶け素地の須恵陶土が観察される。滋賀県近江産系の綠釉陶器と比定され、時期は猿投窯の黒帯14号窯期に比定され(註1)、SK399土壤床面からの出土で土壤の時期10世紀後半が当てられる。203は包含層からの出土であるが201と釉調が異なった綠釉陶器であることから図示した。底部部の破片であるが釉調は淡緑釉刷毛塗りされ、輪高台となる。愛知県鳴海産系に比定される。

(6) 青磁・染付 (第25図、図版22)

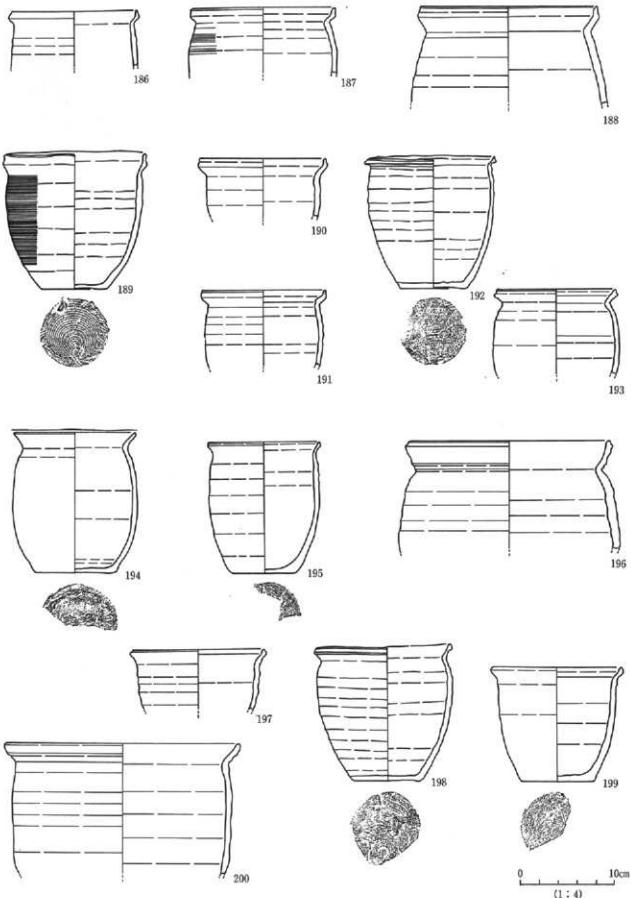
青磁は3点出土、染付は2点が包含層から出土している。204は蓮弁文瓶の口縁部である。体部は丸くなり、口縁でくの字状に折れまとまる。蓮弁は弁先が尖らず丸くなり、幅広いヘラカゼリに作っている。205は口縁下に片切形による雷文帯を持つ碗である。釉掛けは厚く緑黄色を呈す。206は碗の底部である。見込み内面に草花文のスタンプが釉下に施されている。竜泉窯系青磁である。染付は草花を配した皿(207)と碗(208)である。

(7) 製塙土器 (第25図、巻頭図版下、図版22)

3個体が図化できた。210は図上復元による実測図である。バケツ形を呈し、底部から口



第23図 出土遺物(9)赤焼土器壺・赤焼土器壺



第24図 出土遺物即赤焼土器小型箋・赤焼土器裏

縁にかけて垂直に立ち上がり、脚部上半でやや外側へ膨らむ。全体を輪積みに作り器内面には縦による器面整形痕が観察され、底部外周には指圧による整形痕が残る。口唇は上面をヘラによってケズリ整形している。SK67T土壤F2からの出土である。時期は土壤の形態や、判出器により10世紀第1四半期に比定出来る。211・212は底部のみの資料であるが底部外面に切底となり輪積みが明瞭に観察される。212はEP426柱穴に敷かれたように検出されたもので、柱の根固めとしたものと考える。

(8) 中世陶器 (第25図209、図版22)

10条一単位の掘り目をもつ珠洲焼系の陶器である。体部上半から掘り目を描き、口縁部との境で体部が縮くなる。口唇端部はやや丸みを持ち内面との境を作り出している。

(9) 土製品 (第25図、図版22)

土鍤が出土している。土鍤は長さ80mm以上、最大径44mmのもの(213・214)と、長さ52~73mm、最大径約10mm(215~219)及び長さ23~53mm、最大径11~22mm(220~227)となる3種類の土鍤である。調査区域全域から出土したが網の重りとして利用されたものと考える。

(10) 鉄製品 (第25図228・229、図版22)

刀子2点がSX43T性格不明遺構の覆土から出土した。両端は欠落しているが、229は柄部が明瞭に判別できる。両部は水平で断面は三角形となり、柄部は四角形となる。

(11) 石製品 (第26図230~248、図版22・23)

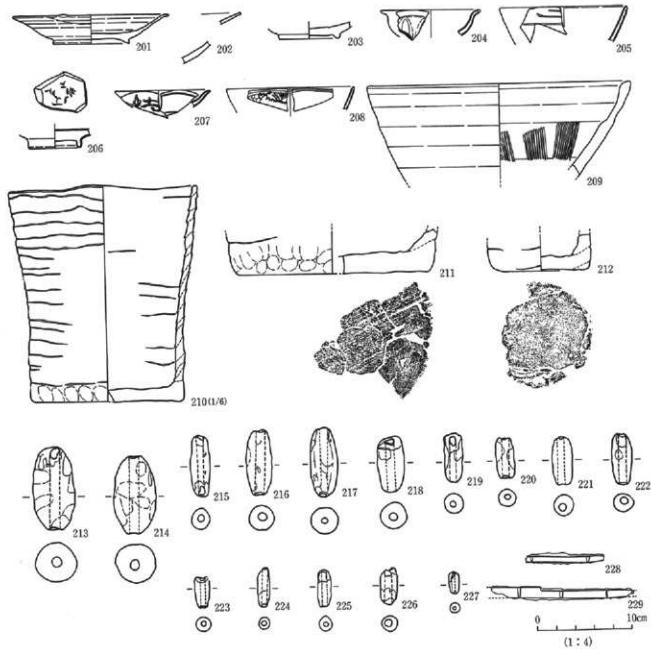
石製品は紡錘車(230)、砥石(231~245)、弾(246~248)である。紡錘車は調査区南西部のH-4グリッド3層上面で検出した。断面を四方形とし、直径46mm、厚さ21mmに中心には径7mmの孔があつており、糸を紡ぐものと考える。砥石は置き砥と持つものがある。233は下げ砥石と呼称されるもので官人が腰に下げたものと思われる。231と237はSD408溝跡から出土した置き砥と考える。弾は90mmと45mm前後の丸い石で、全面が磨かれている。用途不明である。包含層と溝跡からの出土である。

出土遺物の中には墨書きが描かれた土器がある。第27図に集成したが、描かれた土器の種別は須恵器、黒色土器、赤焼土器である。描かれた部位は底部や体部の外面にあり、圧倒的に底部が多い。判読できる文字は「千万」・「万」・「十」・「一」という数字を現すもの、「山」・「上」・「王」・「中」・「力」・「口」・「高」・「漬」「呪」の漢字のほか「つ」や「し」というひらがな状の文字が読める。習書または所有を示す文字と考える。

6まとめ

今回の調査で確認された成果は掘立柱建物2棟、土壤184基、溝状遺構396基、性格不明遺構6基のほか多数のピットが登録された。出土遺物は整理箱にして115箱を数え、遺跡の性格を示す情報が多様であることが示されている。遺構では梁行三間以上で桁行七間の大型建物跡や、一次調査で確認できた数単位にまとまる溝状遺構、これらを囲むように土

墳が存在し、平安時代10世紀前半を中心とした集落の一端を示していると考える。また、遺物では平安時代に開拓民として五道から配置された棚戸の生活が窺える。また、製塙土器がまとまりをもって出土したことは海岸での塙作りが行われていたことを示す。遺跡の所在する遊佐町には本遺跡と性格が似ている遺跡が多い。これらは平安時代出羽国にかかる開拓の歴史といえる。5章では今次の調査の成果を基に、検出遺構の出土遺物からの組成と変遷、出土遺物の時期的考察、庄内地方での製塙土器出土遺跡をまとめ、製塙の意義や平安期の遺跡と記記に記述された項目を参考に、遊佐町を含む飽海郡について考察する。



第25図 出土遺物(1)緑釉陶器・青磁・染付・中世陶器・製塙土器・土製品・鉄製品

- 44 -



第26図 出土遺物(2)石製品

- 45 -

表 6 北目長田遺跡遺物観察表(4)

調査 番号	遺物 名	種 別	部 種	計測値 (mm)	測定部	測定法	出土地點・登録番号	備 考	出土地点・登録番号				
									内	外	面	裏	
22	赤端土器	杯		147	58	60	5 余切	ロクロ	ロクロ	SK010F1			
				134	45	48	4 余切	ロクロ	ロクロ	SK113F1	RP28		
				139	52	54	5 余切	ロクロ	ロクロ	SD067F1	RP61		
				124	60	47	6 余切	ロクロハタメ	ロクロハタメ	SD109F1		埋付着	
				130	54	57	5 余切	ロクロ	ロクロ	SX417F1			
				126	52	43	4 余切	ロクロ	ロクロ	SX437F1		焼付着、灯籠面に膨用	
				128	52	56	4.5 余切	ロクロ	ロクロ	SD133F1	RP59		
				134	50	51	4 余切	ロクロ	ロクロ	F-10H		埋付着	
				139	58	47	6 余切	ロクロ	ロクロ	I-3H	RP67		
				122	56	46	3 余切	ロクロ	ロクロ	SK337F1	RP78		
				128	55	45	5 余切	ロクロ	ロクロ	I-3H	RP69		
				124	50	42	4 余切	ロクロ	ロクロ	2T-15H			
23	171	甕		70	5	6切	ロクロ	ロクロ	FB85Y		加熱による外側剝離		
				49	5	木製底	ロクロ	ロクロ	SK242F1	RP61			
				64	6	6切	ロクロ	ロクロ	SK100F1	RP119			
				70	6	静止点	ロクロハタメ	ロクロ	2T-13H		焼付着		
				7			ロクロ・アラ	ロクロタタキ	SK247F1				
				6			ハケメ	未確認ハタケメ	K-4H	RP94	埋付着		
				177			ガラスハタケメ	ガラスハタケメ	SX374F1				
				178			ガラスハタケメ	ガラスハタケメ	SX374F1				
				179			ガラスハタケメ	ガラスハタケメ	SX374F1				
				180			ガラスハタケメ	ガラスハタケメ	SX374F1				
24	186	甕		220			ロクロ	ロクロ	SK298F1	RP20			
				154	5		ロクロ	ロクロ	SK057F2	RP48	焼付着		
				190	9		ロクロ	ロクロ	SD064F1	RP12			
				151	70	146	6	ロクロ	ロクロハタメ	SD064F1	RP114	埋付着	
				134			ロクロ	ロクロ	SD067F2				
				132			ロクロ	ロクロ	SD067F2				
				134			ロクロ	ロクロ	SD067F2				
				135	117	9	ロクロ	ロクロ	4T-6H				
				146	67	140	7	ロクロ	ロクロ	SX338F1		口唇感應窓の様あり	
				166	70	136	6	ロクロ	ロクロ	SK270F1			
				132			ロクロ	ロクロ	SK298F1				
				154			ロクロ	ロクロ	SK057F2	RP48	焼付着		
				190			ロクロ	ロクロ	SD064F1	RP12			
				151			ロクロ	ロクロ	SD064F1	RP114	埋付着		
				134			ロクロ	ロクロ	SD067F2				
				132			ロクロ	ロクロ	SD067F2				
				134			ロクロ	ロクロ	SD067F2				
				134	72	140	5 静止点	ロクロ	ロクロ	F-4H			
				126	90		ロクロ	ロクロ	SK364F1				
				130	86	147	6 ハーフ切	ロクロ	ロクロ	SK378Y	RP98	焼付着	
				120	66	138	6 ケズリ	ロクロ	ロクロ	SK324F1	RP61		
				195			ロクロ	ロクロ	SD112F				
				213		10	ロクロ	ロクロ	SD067F2	RP82			
				158			ロクロ	ロクロ	SD067F2				
				142	72	139	6 余切	ロクロ	ロクロ	SX338F1			
				140	78	120	5 余切	ロクロ	ロクロ	D-3H	RP36	外側加熱、内側偏付着	
				230		8	ロクロ	ロクロ	SD066F1				
25	201	棘輪土器	皿	166	32	30	3		SK369F1		手持と握り袖・沿江底		
									SK369F1	RP89	かけ巻、鐵鉢		
				202							北京III		
				203		64	6				北底II		
				204	青磁	碗	105				青文書		
				205			136				北底III		
				206			55				内底X、原文		
				207	煮付	皿	82				3T-4H		
				208	(青花) 銅	136					草花X、原文、2次加热		
				209	中豆切器	罐鉢	289				南区III	10cm一単位の標目	
				210	翼足土器	パツク形	305	247	343				
				211			200				SK067F2	軸輪	
				212			100				SK447F1	指揮・砂蓋	
											ED26F1	模様巻き上げ・砂底	

表 7 北目長田遺跡遺物観察表(5)

調査 番号	遺物 名	種 別	部 種	計測値 (mm)	測定部	測定法	出土地點・登録番号	備 考	出土地点・登録番号			
									高 S	横 大	幅 深	面
25	土器品	土器		84	44	30	152	B-3H				
				82	44	19	141	B-3H				
				215	64	26	7	26	SK401F1			
				216	69	28	19	41	A-7H			
				217	72	29	7	56	4-10H			
				218	70	29	7	44	3-7H			
				219	52	26	7	21	SD027F1			
				220	43	21	7	15	B-3H			
				221	50	22	8	21	1-10H			
				222	53	22	8	20	南区III			
				223	35	11	7	10	南区III			
				224	41	14	5	6	北底III			
				225	49.5	14	5	6	北底III			
				226	49	18	8	19	2T-15H			
				227	23	11	3	2	南区III			

鉄製品

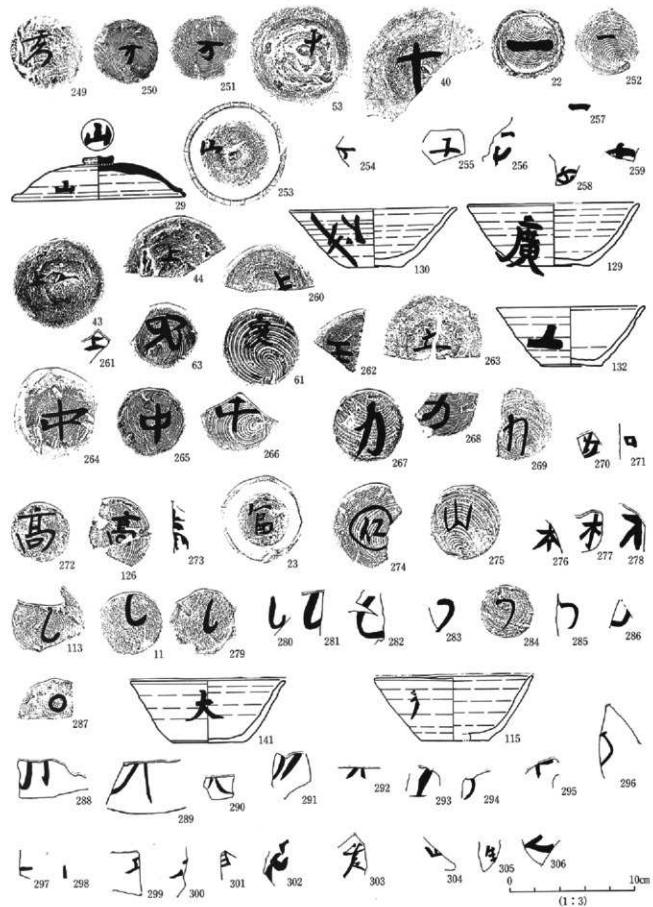
調査 番号	遺物 名	種 別	部 種	計測値 (mm)	測定部	測定法	出土地點・登録番号	備 考	出土地点・登録番号			
									長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	面
25	鉄製品	刀	刀身	46	45	5	59	H-4H				
			刀身	60	67	6	361	SD010F1	RQ102			

石製品

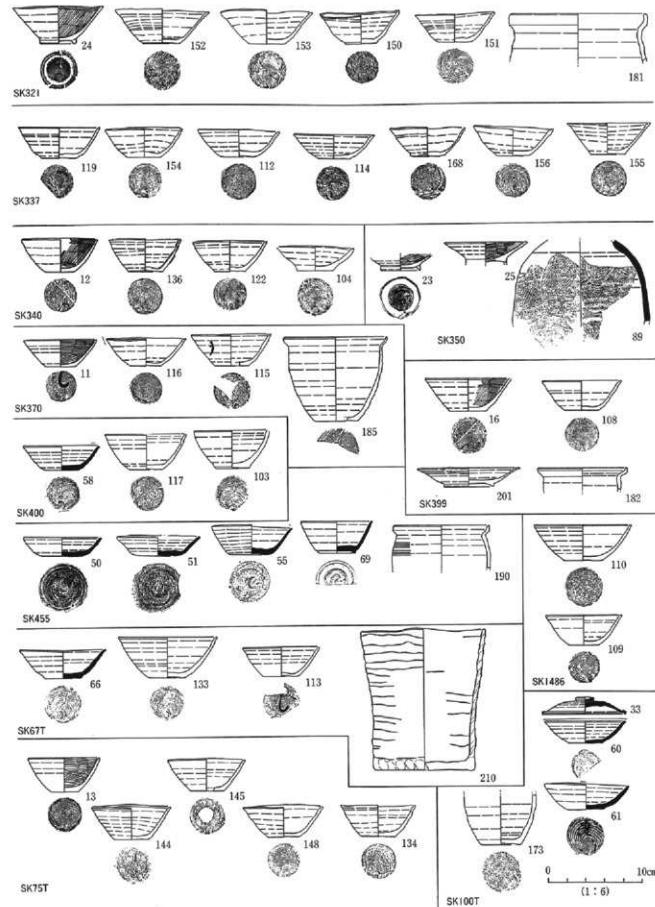
調査 番号	遺物 名	種 別	部 種	計測値 (mm)	測定部	測定法	出土地點・登録番号	備 考	出土地点・登録番号			
									長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	面
26	石製品	石斧	石斧	46	45	5	59	H-4H				
			石斧	60	67	6	361	SD010F1	RQ102			
			石斧	85	54	15	156	SD010F1	北底III			
			石斧	49	32	35	350	SD010F1	下区III			
			石斧	43	43	35	43	SD010F1	北底III			
			石斧	51	22	24	24	SD010F1	北底III			
			石斧	85	29	45	45	SD010F1	北底III			
			石斧	146	36	51	36	SD010F1	北底III			
			石斧	50	45	35	35	SD010F1	北底III			
			石斧	100	79	313	313	SK399F1				
			石斧	65	51	93	93	SD010F1				
			石斧	55	58	94	94	SD010F1				
			石斧	29	53	141	141	SD010F1				
			石斧	69	43	43	43	SD010F1				
			石斧	52	53	416	416	SD010F1				
			石斧	90	80	80	80	SD010F1				
			石斧	47	41	77	77	SD010F1				
			石斧	42	40	87	87	SD010F1				

墨書き器

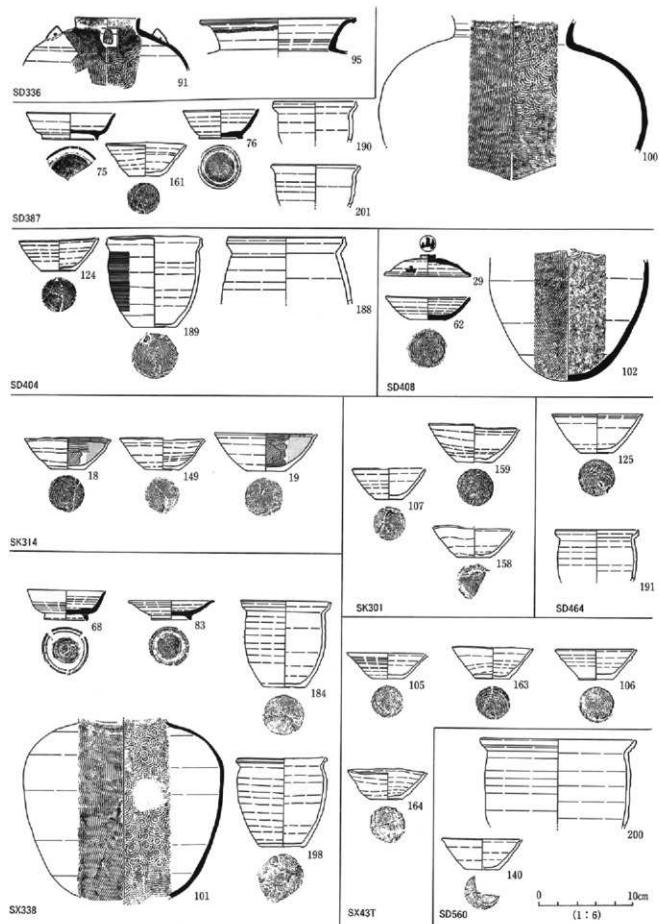
調査 番号	種 別	部 種	墨書き	出土地點・登録番号	備 考	出土地点・登録番号					
						高さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	面		
27	漆器	漆器	漆器	78	E-9H						
			漆器	79	7	26	SK401F1				
			漆器	64	26	7	26	SK401F1			
			漆器	69	28	19	41	A-7H			
			漆器	72	29	19	41	A-7H			
			漆器	73	29	19	41	A-7H			
			漆器	70	29	19	41	A-7H			
			漆器	71	29	19	41	A-7H			
			漆器	72	29	19	41	A-7H			
			漆器	73</							



第27図 墨書文字集成



第28図 土器組成図(1)



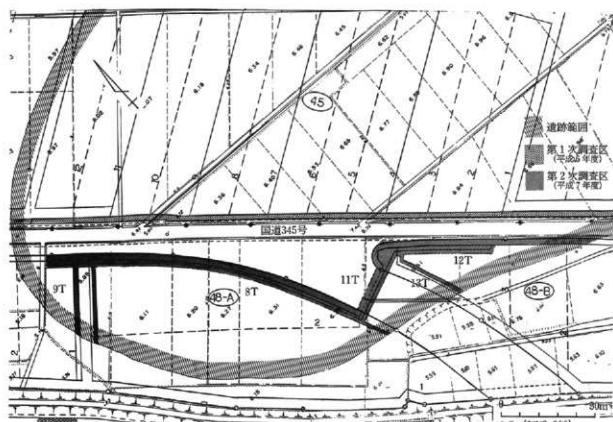
第29図 土器組成図(2)

IV 権待遺跡

1 調査の概要

今回の調査は、平成6年度に統いての第2次発掘調査である。遺跡域の南端部分1,500 m²を調査対象区としており、水路設置に係る縦的調査である。調査区の幅は2m～5m、長さは450mになる(第30図)。平成6年度に実施した国道345号線沿いの第1次調査区も、県営は場整備事業に伴うもので、水路設置に係る縦的調査であった。面的な調査は実施されておらず、第1次・第2次調査区、及び県教育委員会で実施した立ち合い調査区(平成5年度)以外の部分については、現状保存が計られている。これまでの調査で検出された主な遺構は、立ち合い調査時に検出された溝跡SD1と井戸跡SE2のみである。広範な遺跡内に、建物や井戸跡等の遺構群が集中するブロックが存在することは推測できるが、遺跡の性格他の詳細を知るだけの資料は得られていない。以下、今回の調査の作業工程と経過を略記しておく。

平成7年6月20日、北目長田遺跡の調査と並行する形で調査を開始した。まず、重機を導入して水路部分の表土を除去した。次に、土の状態を確認しながら遺構検出のための面整理を行った。8トレンチより開始し、9・10・11・13・12トレンチの順で調査を進めたが、遺構・遺物は極めて希薄であった。写真撮影を中心とした記録作業を行って、7月19日に調査を終了した。



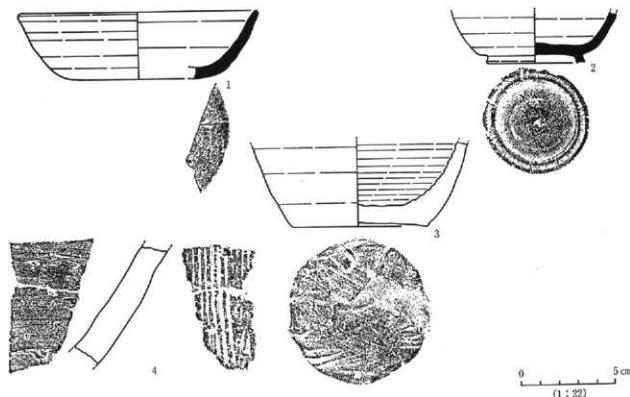
第30図 権待遺跡調査概要図(S=1:2,000)

2 検出された遺構と遺物

横待遺跡は試掘調査や、平成5年度の排水路対象の調査で井戸跡や溝跡などの若干の遺構が検出されている。これらは地山層に達する深度が比較的浅い微高地の地点に限られ、土壤や柱穴など遺構群が集中するいくつかのブロックが存在すると推測されている。今次の調査は国道345号の南側に設置する排水路地区を対象に実施されたことから、遺構はピットが6基と整理箱1箱の遺物が検出されたにすぎない。これらは遺構群が集中するブロックからはずれたことによるものと考える。しかし、遺跡を覆う包含層からは第31図にある遺物が数点出土した。第31図1・2は須恵器の杯である。1は底部の切り離しを回転窓切りとし、器面にクロコ痕を明瞭に残す。底部から口縁にかけて急速に立ち上がる。2は高台付杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りとし付高台としている。3は赤焼土器の甕底部である。底部の切り離しを静止糸切りとし、やや底部が上がる。4は株洲系陶器の壺である。10条の櫛目が確認できた。時期は10世紀中頃から中世と幅の広い時期である。

3 まとめ

排水路設置に係る長さ450m、幅2m~5mという線の調査であるため遺跡の性格や内容については不明である。包含層の精査からは遺跡としての立地条件となる自然堤防の微高地は確認されなかった。遺跡の範囲は国道より北側へ縮小されるものと考える。



第31図 横待遺跡出土遺物

V 総括

本書は、平成7年度県営は場整備事業（高瀬川地区）に係る北目長田遺跡と横待遺跡の緊急発掘調査の成果をまとめたもので、両遺跡は平成6年度にも調査（第1次）が実施されている。その成果は以下の通りである。

北目長田遺跡では3~4グループにまとまる畝条の溝跡に重複する土壤と建物跡の存在が確認されている。遺跡の時期は出土遺物から9世紀前葉から中葉としてとらえ、遺構の組成から3段階の変遷をたどると検証している（註1）。これらは各遺構出土の土器群から動向を探り、時期を考慮にいれた遺構の変遷を明示している。しかし、建物跡については畝状の溝跡の下面から検出されたため、建物跡としての構成が困難であった。また、畝跡では真北方位をとる一群を古、やや東に振れる一群を新と判断しており、重複関係から3ないし4時期の変遷が辿れるとしている。あとでもふれるが特異な検出例として製塙土器の出土がまとまりをもって焼土や木灰の炭化物と共に確認されており、標高5m内外の立地条件のなかで製塙活動が行われていることを示唆している。そのほかでは土壤や溝跡、柱穴等から出土した板材や柱根の樹種鑑定、C14年代測定、火山灰分析等の理科学分析を実施し遺跡の年代や性格の考證を行っている。

横待遺跡の調査は事前の立会調査（平成5年度実施）で井戸跡や溝跡等の遺構と共に須恵器や赤焼土器が検出している。1次調査では排水路設置部分という線に限った調査で、遺跡の範囲を確認する調査であった。その結果では遺構は見られなかったが、包含層とした表土下から平安時代の土器類が検出された。試掘調査とトレチ割査を合わせた結果から、東西460m、南北280mという広大な範囲の中に遺構群の集中する箇所が4ないし5カ所ほど存在するものと推測している。今次の調査も事業計画による排水路部分に限定した調査であったことから、遺構は建物跡として組み合わせることができなかったピットのみの検出である。遺跡範囲部分であったことで明確な遺跡内容を示すことが出来なかつた。現国道345号より北側の地域に遺跡本体が存在しているものと推測できる。

ここでは前年度の調査成果と今次の調査成果を合わせ、北目長田遺跡を主にして遺跡の性格や検出遺構からの時期等をまとめ、考察とする。

北目長田遺跡はその遺跡範囲が117,600m²という東西に長く広がった遺跡で、庄内高瀬川の右岸となる自然堤防上に存在する。調査は1次・2次合わせて面調査区では7,100m²、線となる調査区4,120m²の計11,220m²である。遺跡範囲の約9.5%であり一割にも満たない調査面積である。このことは横待遺跡でも云えることでもあるが遺跡の立地条件が沖積地の中の微高地であることや、高瀬川等の自然堤防上に存在していることがいえる。本遺跡から南東半径2.5km圏内に所在する大坪遺跡や石田遺跡、宅田遺跡など、高瀬川流域の両岸に所在する遺跡は同様な条件下にある。庄内地方の最上川以北冲積平原部は最上川を主とし

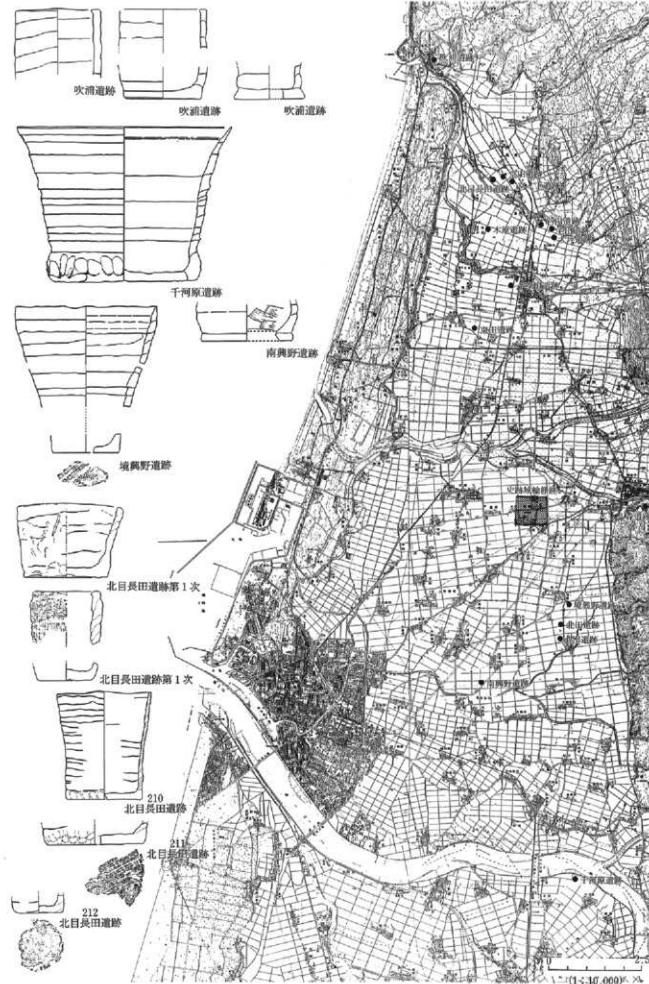
て、東方の出羽山地や、鳥海山からの中小河川による土砂の流入によって形成されている。遺跡の分布もこれら比較的高い自然堤防や微高地に居住域としていることによる。そして、各遺跡内には居住域として条件が整った微高地域が數カ所集合して遺跡に認定されたものと考える。

遺構内からは40箱の出土があった。遺物の総数は14,071点を数え、その75%が赤燒土器で須恵器は15%、土師器・黒色土器が4%、製塩土器5%で、そのほかは陶磁器・株洲系陶器・刀子・土鍬・砥石である。これらの遺物は遺構との性格や時期に開けを示し、本遺跡や周辺の遺跡に示唆を示す。以下に遺構の性格と営まれた時期について推測を記す。

調査で検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、土壤184基、溝状遺構396条。性格不明遺構6基、そのほか建物跡に結びつからなかったピット多数が検出された。建物跡は1次調査では確認できなかったが、今次の調査では築行が三間以上、桁行四間以上から七間となる大型の建物跡で母屋的な構造を呈している。柱の跡は径40~60cmと大きくしっかりとした建物跡である。S B 1 建物跡は東西棟となり、柱穴内からの出土土器(171及び圓化出来なかつた他の柱穴より出土した环形土器)により9世紀第4四半期に当たられる。S B 2 建物跡は南北棟で、E B 37 T柱穴から出土した128の环形土器により9世紀第2四半期に比定される。そして、建物跡の周辺には土壤や溝跡が取り囲み、居住と生産域が存在する。土壤内出土遺物や溝跡出土遺物は、その組成から営まれた性格や時期が窺える。第28・29図には遺構内出土土器組成図を示した。また第3章5では土師器から石製品までを実測図と共に土器については製作技法や器形等の特徴を示し類別した。類別は時期等の年代観を現すものと考えるが、出土遺物は総じて9世紀中頃から10世紀中頃を主とした時期の年代が当たられる。以下に土壤及び溝跡の時期を伴出土器により推測する。

土壤は形態や規模等で4類に類別した。A類の土壤は供膳形態の環や煮沸・貯蔵形態を呈する甕・壺が出土した。A類の土壤は円形または隅丸方形を呈し、長径が1m前後のやや小形の土壤である。出土した土器は、赤燒土器の环ではいびつな器形を呈する内面黒色化した22、口唇が外反する赤燒土器の137及び直立する111である。これらの特徴から時期は10世紀第2四半期に比定される。B類の土壤は隅丸方形を呈し、長軸が2m前後する中形の土壤である。赤燒土器の环が多く出土し、その特徴は体部が丸みをもち、口縁で外反するものや、直立するものがある。時期は10世紀第1四半期に比定される。特異なものとしては210・211の製塩土器がこの類別した土壤から出土している。C類は底径に対し口径が、1:2となり、均整のとれた器形を呈している。出土量も多く、本遺跡性格の特徴を表している。S K 321土壤の覆土1層には火山灰の粒子が堆積している。降灰以前の遺構と判断され、時期は9世紀第2四半期と考える。D類の土壤は長軸が5m内外を測る長幅円形を呈した大型の土壤で遺物の出土量は大形にしては少ない。貯蔵形態の須恵器や赤燒土器の壺が出土し、炭化物ブロックなども含み遺構の機能が窺える。時期は9世紀第3四半期と考える。

溝状遺構は調査グリッドから4ブロック(A~D区)に構成されることや、走行方向に



第32図 庄内地方製塩土器出土遺跡・製塩土器実測図

よって5類に類別した。各溝跡覆土中からは溝跡埋没の過程で土器類が廃棄または流れ込んでいる。出土遺物のより各区の時期を検討する。各区の溝跡は1類から5類の走行方向が見え、南北方向の溝跡は切り合い関係から1-2-3類の順に変遷され、東西方向の4・5類の変遷は同時期と考える。1類はヘラ切り須恵器や甕が出土しており、9世紀第3四半期に考える。2類はSD927溝跡から出土した須恵器甕(88)により9世紀第4四半期と考える。3類は糸切りの赤焼土器や同甕により10世紀第1四半期に当たられる。3類とした溝跡からは製塙土器の破片が多く出土している。4・5類はいびつな器形をした糸切りの赤焼土器や小型の甕が出土しており、観察により時期は10世紀第2四半期と考える。

本遺跡の出土遺物で注目されるものとしては第1次調査でも出土しているが、製塙土器があげられる。遺構内出土土器破片数の6%で、第1次調査では総出土遺物数の23%の出土である。

山形県海岸部に面する庄内地方平安時代の土器製塙について注目された最初は新潟県との境を接する鼠ヶ関遺跡(註2)である。製塙跡と共に土器製塙跡が確認され、多数の製塙土器片が出土している。また、鶴岡市貝塚遺跡でも製塙土器片が表揚され、庄内地方の海岸砂丘地には製塙を営む遺跡が存在する可能性があることを示唆している(註3)。その後県宮ほ場整備事業等に伴う発掘調査で酒田市境興野遺跡(註4)、余目町千河原遺跡(註5)、遊佐町吹浦遺跡(註6)等の製塙土器を出土する遺跡が次々に確認され、平野部や海岸に面する台地上の遺跡で製塙が営まれていたことが報告されている。しかし、これらの遺跡は現在の海岸から直線距離で約3~21km内陸部に位置し、製塙生産遺跡としては問題が残る。当時の古環境(標高5m位までが海岸に近い潟湖の存在を推定して)からは海水を選び、土器による煮沸の食塩採取は判断が難しい。第1次生産作業としては海岸のそばで、しかも燃料としての灌木が手にいれることができると作業が出来ないのではないかとは考える。上記の遺跡にすれば土器照蒸という工程を為したものかもしれない。海水からの製塙の工程が採穀(漁獲)と煮蒸(煮沸)に大きく分けられるがその行為はいつに始まったのかは不明である。ここでは近藤義郎の論提(註7)に従い庄内地方の製塙遺跡について以下に述べる。

現在までに製塙土器が確認されている遺跡は17箇所を数える。第23図には庄内地方の中で集中して出土している最上川以北の飽海郡平野部の土器を図示した。いずれも12分の1の縮図である。明瞭な輪積み痕を残し、内面には¹ラによる成形痕を施すものもある。海水による食塩採取作業から考えれば、大形の土器は海岸部での煮沸工程、小形のものは集落に持ち帰った濃縮塙を後の時代で云う焼塙または固形塙の製造工程用のものと考える。このことは本遺跡S K67T土壤での検出が藁灰と共に検出され、二次加熱が認められたことによる。境興野遺跡や、千河原遺跡では出土しなかったが、本遺跡や吹浦遺跡では大形と小形が出土している。また、大形土器の口縁や底部の内面に剝離が認められることや、検出時に小さく破片となって出土することから、長時間の連続加熱が土器に影響を与えたものと考える。推論とはなるが製塙を行なう集団の存在が窺える。8世紀前半頃に出羽移民

として北関東や東海・北陸・東山道等の民が棚戸として配置され、田地開拓と共に生活上必要であった塙分の撰取が不可欠となり開拓作業と同時に海岸での煮沸製塙作業が行われたと考える。開拓と製塙という作業が年間の生活サイクルの中でどの様に営まれたのかが課題として残る。棚戸として移民した人々が、在地の農夫といわれる人々と融和しながら移民時に自分達が持ってきた製塙技術と、在地の人たちの製塙技術を取り組まれ、庄内地方での製塙が確立したものと考える。

註1 阿部彦彦・佐藤善春 「北目長田・櫛待遺跡発掘調査報告書」

山形県埋蔵文化センター調査報告書第24集 1995

註2 加藤 孝 「古代鼠ヶ関跡調査報告 考古学上の考察」 庄内考古学9 1969

註3 川崎利夫 「日本土器製塙研究 6 山形県」 近藤義郎編 青木書店 1994

註4 川崎利夫・安部 実 「境興野遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第46集 1981

註5 野尻 侃・佐藤庄一 「千河原遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第80集 1984

註6 渋谷孝雄 「吹浦遺跡第1次」 山形県埋蔵文化財調査報告書第82集 1984

註7 近藤義郎 「土器製塙の研究」 青木書店 1984

「土器製塙の話」 考古学研究103~107 考古学研究会 1979~1980

そのほか、石川県鹿島郡中島町教育委員会生涯学習課の室久則課長・高田則晃主事・山本純也主事補・下村好美埋蔵文化財整理員には能登半島での製塙土器出土遺跡や、出土遺構等、詳細な指導を受けた。記して感謝申し上げる。また、参考となった遺構や、報告書等について教示いただいた。以下に参考文献として記す。

参考文献

中島町教育委員会 「ヤトン谷内遺跡 能登における古代製塙遺跡の調査」 1995

四柳喜章 「能登式製塙土器について-特に石川県穴水地方を中心に-」 若木考古87

国学院大学考古学会 1968

橋本澄夫 「古代能登塙に関する一試論」 論集日本原史 吉川弘文館 1985

近藤義郎 「日本土器製塙研究」 青木書店 1994

そのほか多数の文献を教示いただいた。

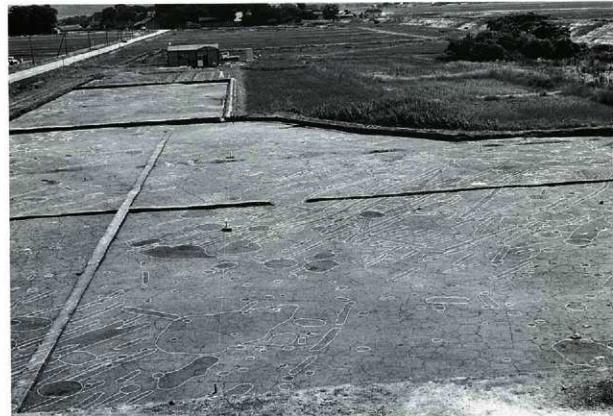
報告書抄録

ふりがな	きためながないせき・そりまちいせきだいせじほつてしょくせうこうくしょ						
書名	北目長田遺跡・檜待遺跡第2次発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第31集						
編集者名	野尻 侃・佐藤善春						
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301						
発行年月日	西暦1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
北目長田	山形県 鶴岡市 遊佐町 大学北目 字長田	6461	平成3年 度登録	39度 02分 28秒	139度 54分 00秒	19950508～ 19950811	7,920 営業場整備事業 (高瀬川地区)
檜待	山形県 鶴岡市 遊佐町 大学北目 字檜待	6461	平成3年 度登録	39度 02分 19秒	139度 54分 16秒	19950620～ 19950719	1,500
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北目長田	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡2棟 土壙184基 溝状遺構396条	須恵器 赤燒土器 黒色土器 製塩土器 綠釉陶器(近江産・鳴海産) 龍泉窯系青磁 染付 刀子、土鍬 紡錘車、下げ砥石	南北に走行する溝跡群と土壙を多数検出。 製塩土器が土壤内よりまとまって出土し、量的にも多い。		
	檜待	集落跡	平安時代	ビット	須恵器 赤燒土器 珠州系陶器	遺跡縁辺部のため遺構遺物の検出状況が希薄であった。	

図版



北目長田遺跡近景(西から)



遺構検出状況(北から)

図版 2



3 レンチ面整理作業(南から)



造構精査状況(南から)



SK321記録作業(西から)



調査説明会(南から)



調査区東側断面基本層序(西から)

図版 3



2 レンチ造構検出状況(東から)



4 レンチ造構検出状況(東から)



5 レンチ造構検出状況(北から)



6 レンチ造構検出状況(東から)



SB I 検出状況(東から)



SB I 完掘状況(東から)



SB 2 検出状況(南から)



SB 2 他掘り下げ状況(北から)



SK399遺物出土状況(南から)



SK337土層断面(南から)



SK337遺物出土状況(南から)



SK340土層断面(東から)



SK340遺物出土状況(東から)



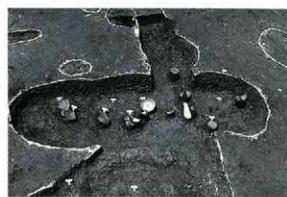
SK321土層断面(南から)



SK321遺物出土状況(南から)



SK455・SD453・SK454土層断面(東から)



NK455・SD453・SK454遺物出土状況(東から)



SK370土層断面(北から)



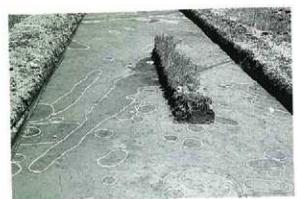
SK314土層断面(南から)



SK50土層断面(南から)



SK50遺物出土状況(西から)



4T-6 グリッド遺構検出状況(西から)



4T-6 グリッド遺構掘り下げ状況(西から)



SK67T 土層断面(東から)



SK67T 製陶土器出土状況(西から)



4T-6 遺構完掘状況(西から)



SD387 土層断面(北から)



SD387 遺物出土状況(北から)



SD927 土層断面(南から)



SD336 土層断面(北から)



SD562 遺物出土状況(南から)



SD408 遺物出土状況(南から)



SD708 遺物出土状況(南から)



SD464 土層断面(東から)

図版 8



SK100T遺物出土状況(西から)



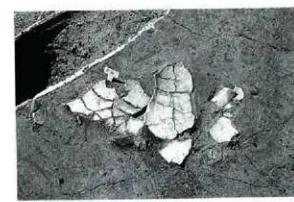
RP 2 須恵器大甕土状況(南から)



SD408遺物出土状況(南から)



RP 66~70赤燒土器環出土状況(南から)



RP94赤燒土器壺出土状況(東から)



RP104黒色土器壺出土状況(東から)

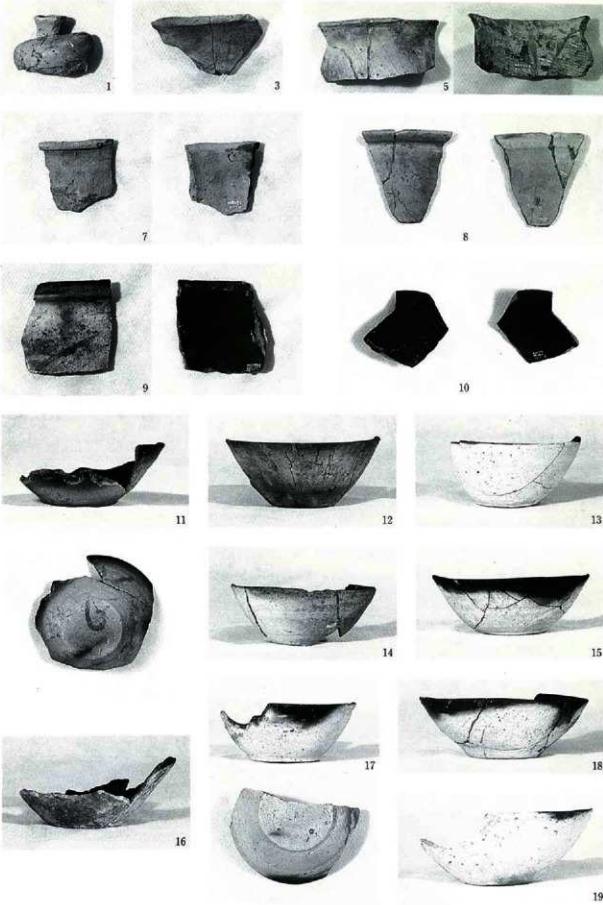


RP118製塙土器出土状況(西から)



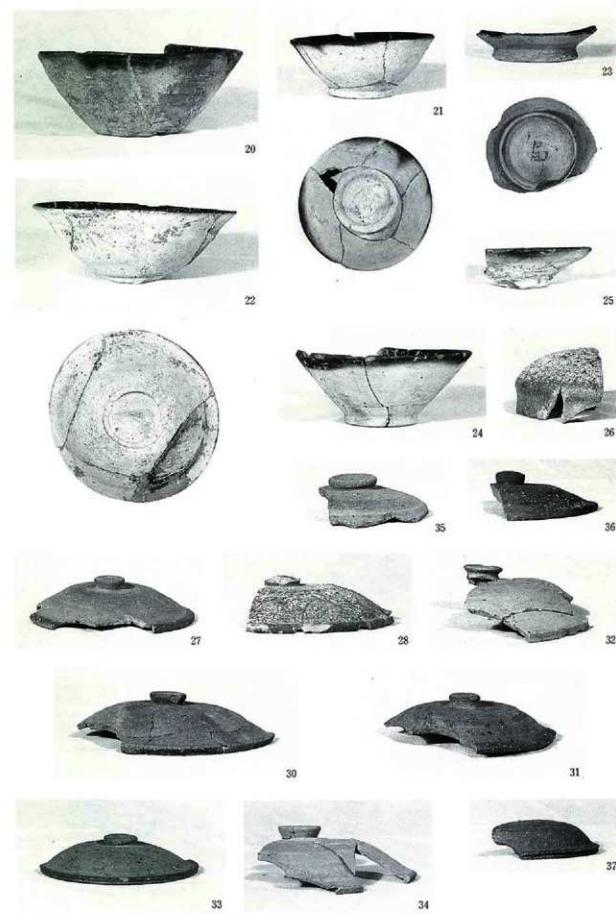
RM116刀子出土状況(北から)

図版 9

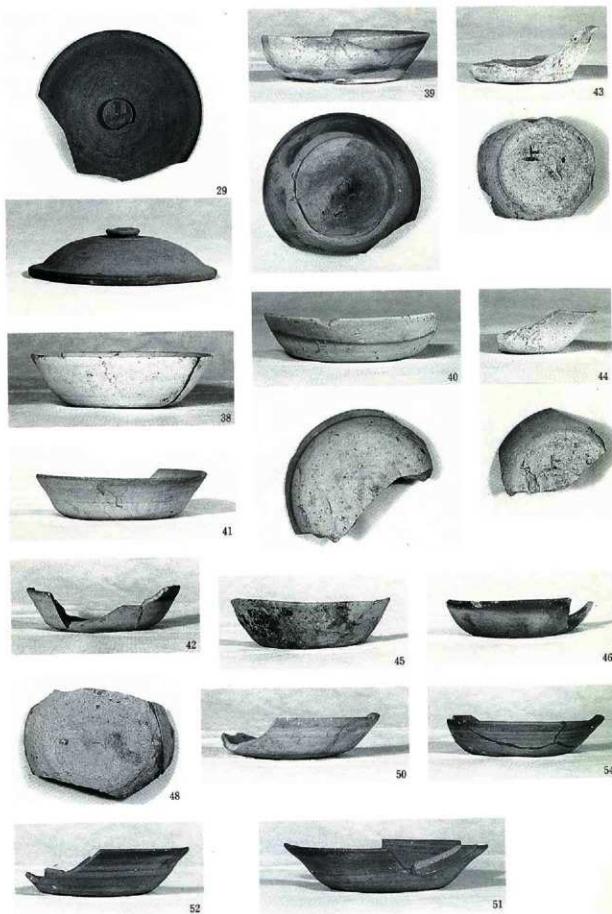


19

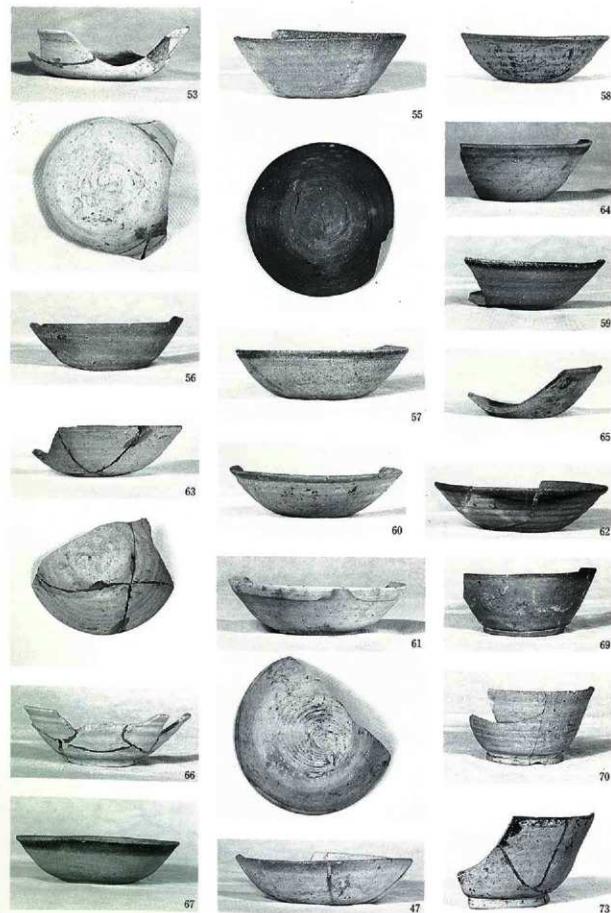
図版10



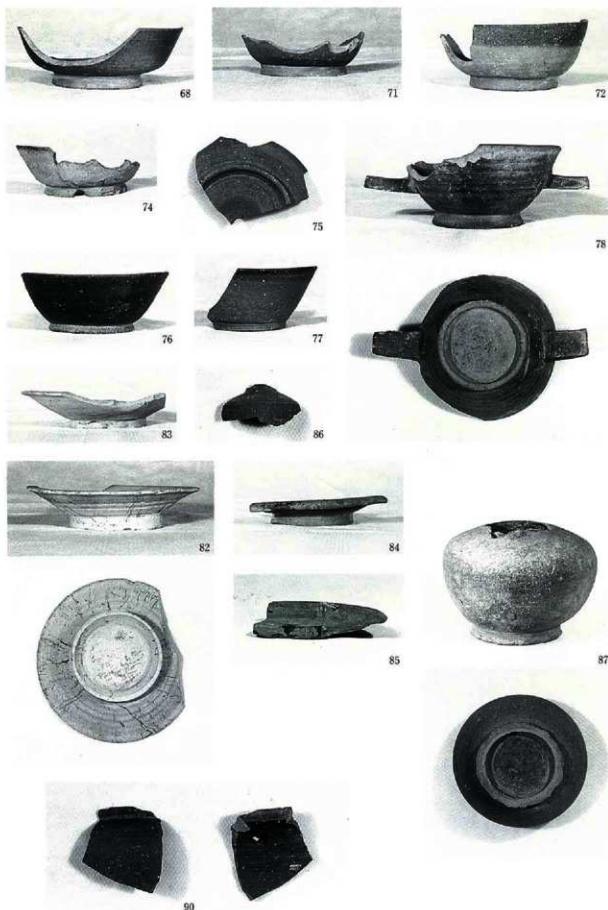
図版11



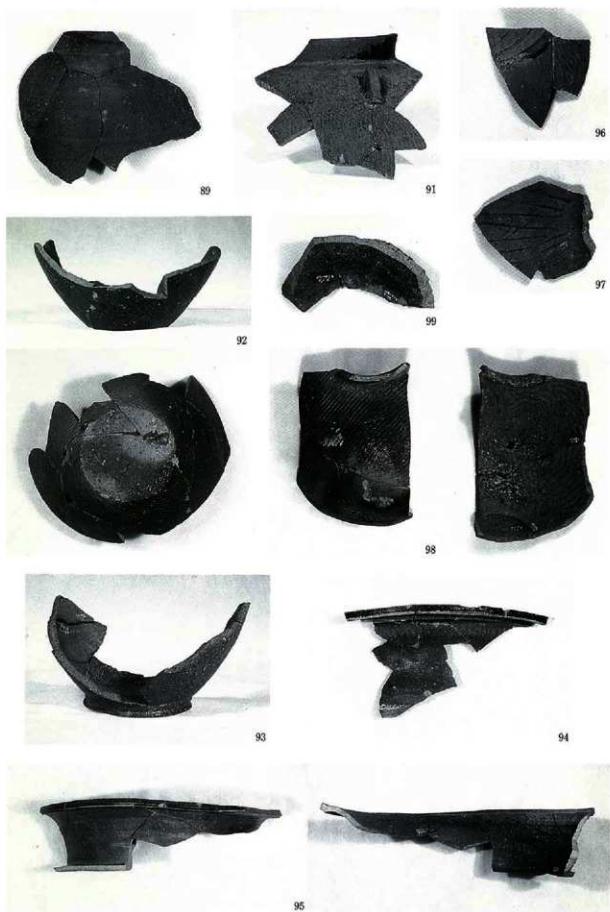
図版12



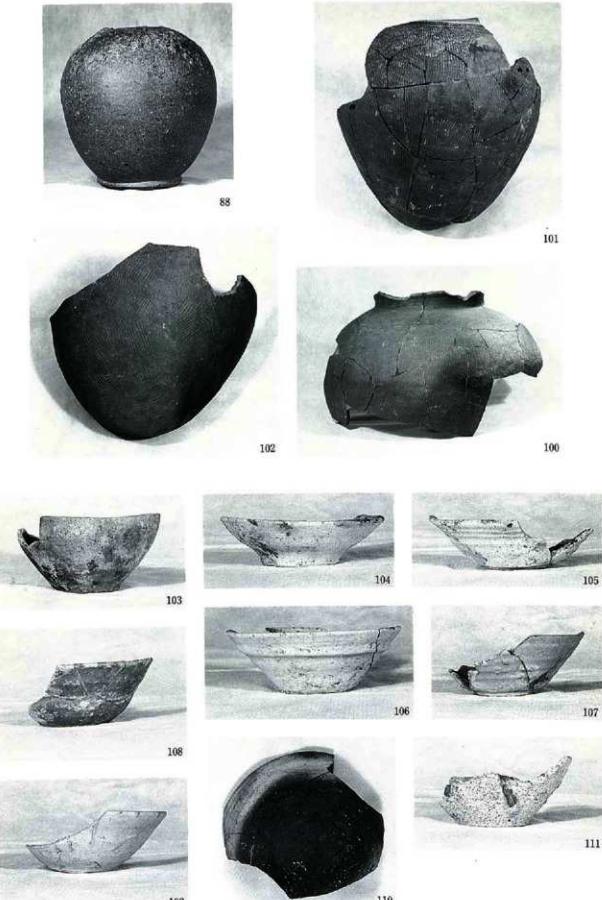
図版13



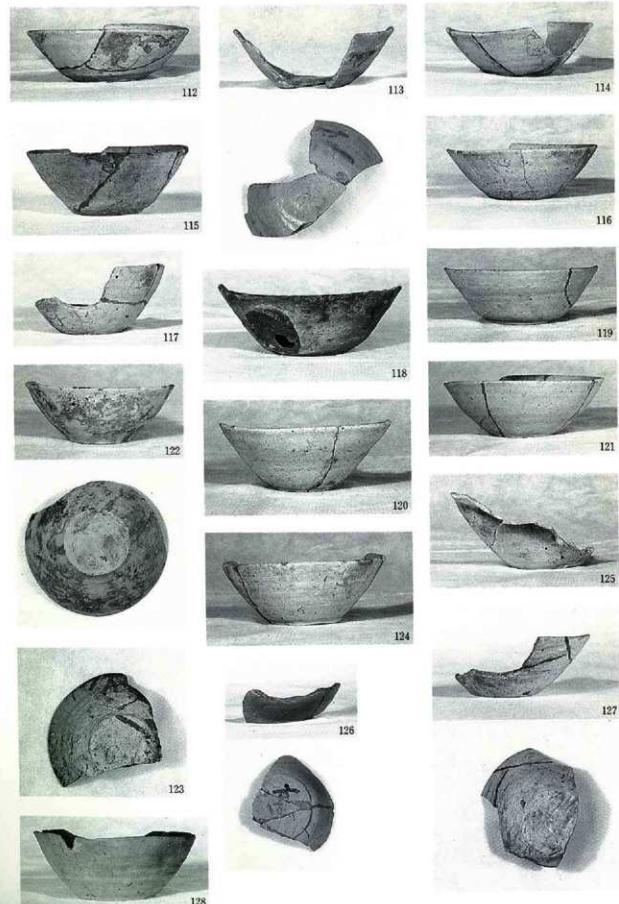
図版14



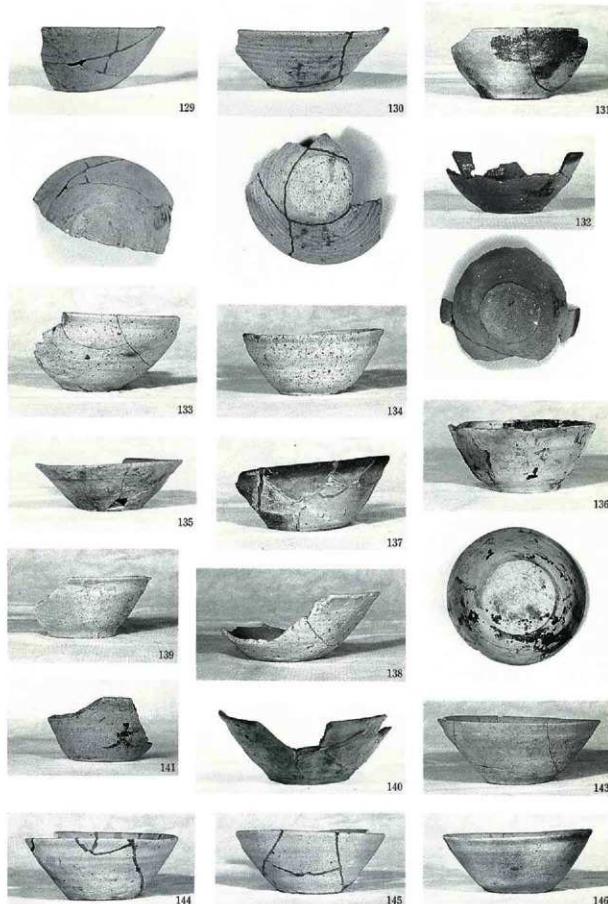
図版15



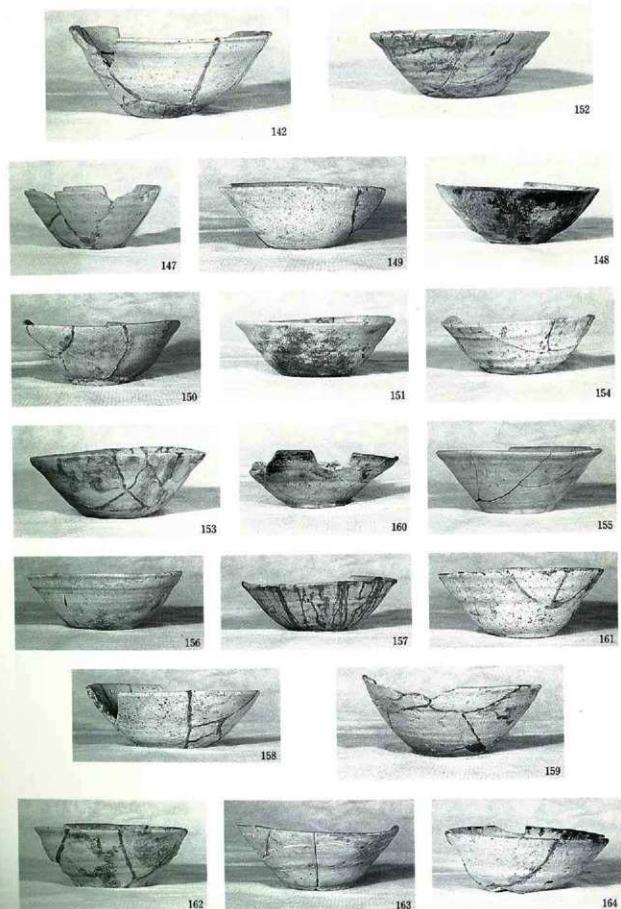
図版16



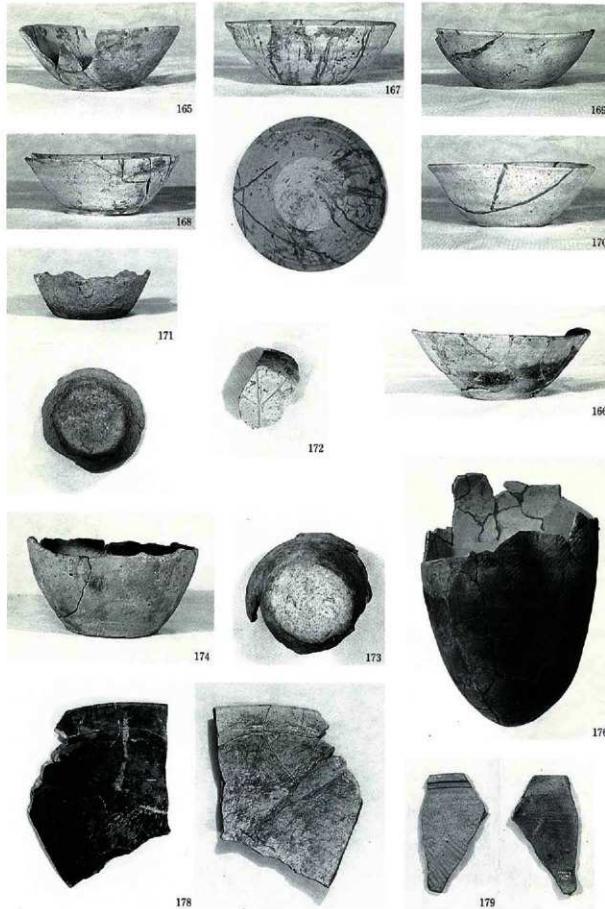
図版17



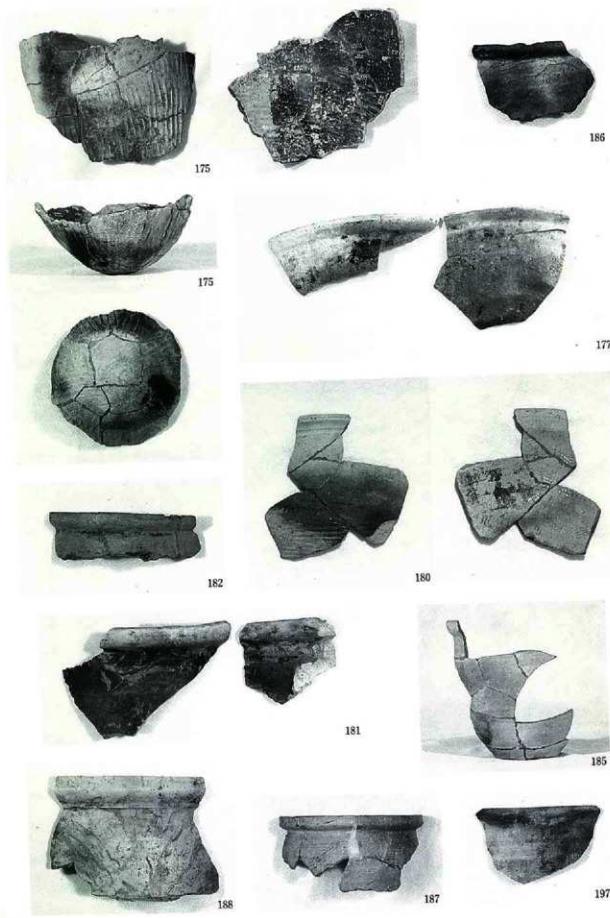
図版18



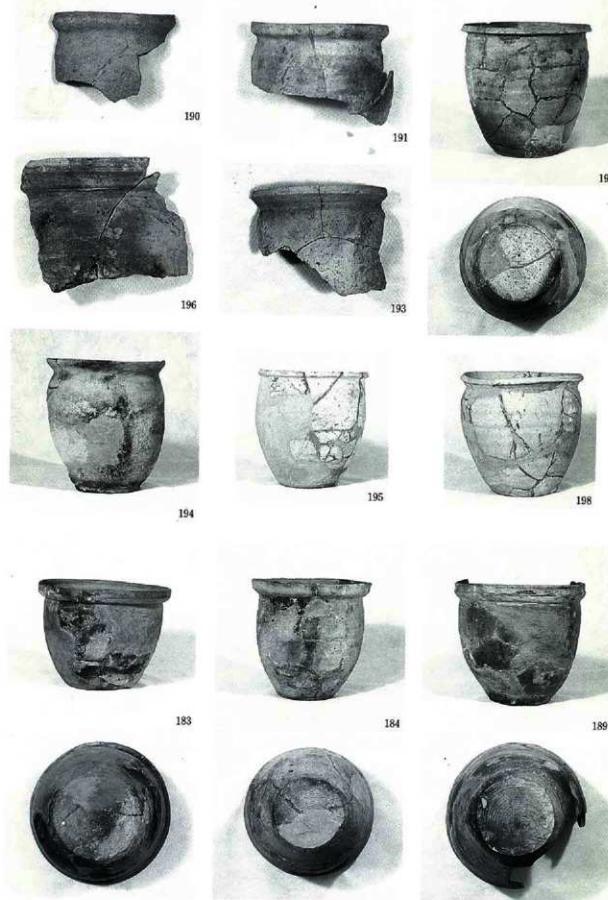
図版19



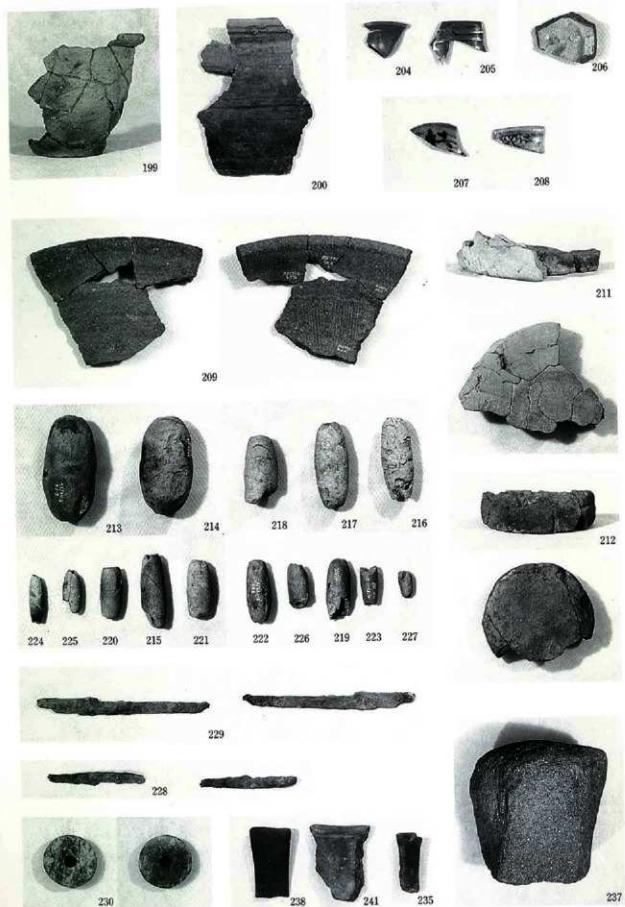
図版20



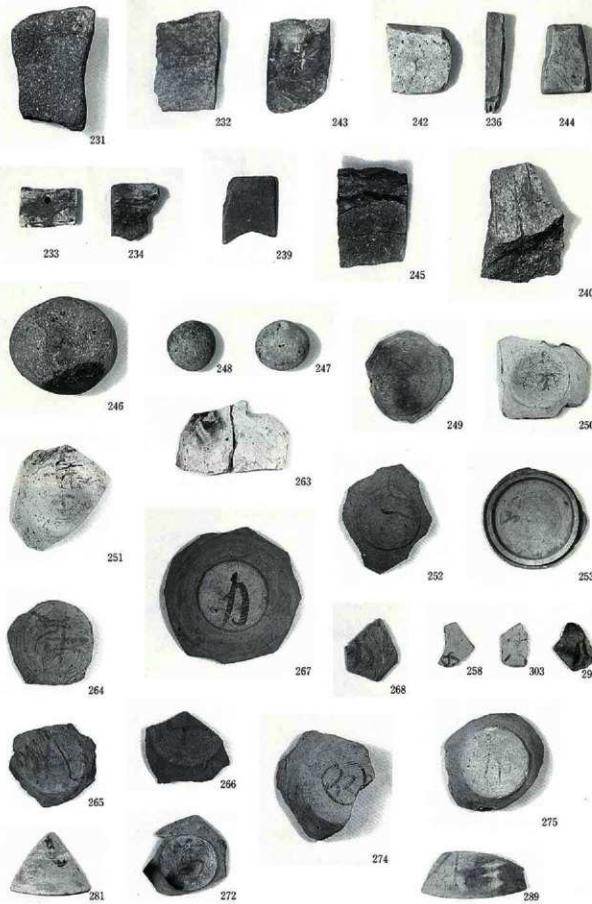
図版21



図版22



図版23





8 トレンチ面整理作業(北から)



8 トレンチ粗掘状況(南から)



12 トレンチ粗掘状況(南から)



12 トレンチ遺構検出状況(西から)



焼跡遺跡調査状況・出土遺物

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第31集

北自賀由遺跡
燒跡遺跡

第2次発掘調査報告書

平成8年3月15日 印刷

平成8年3月31日 発行

発行 山形県埋蔵文化財センター

印刷 藤庄印刷株式会社